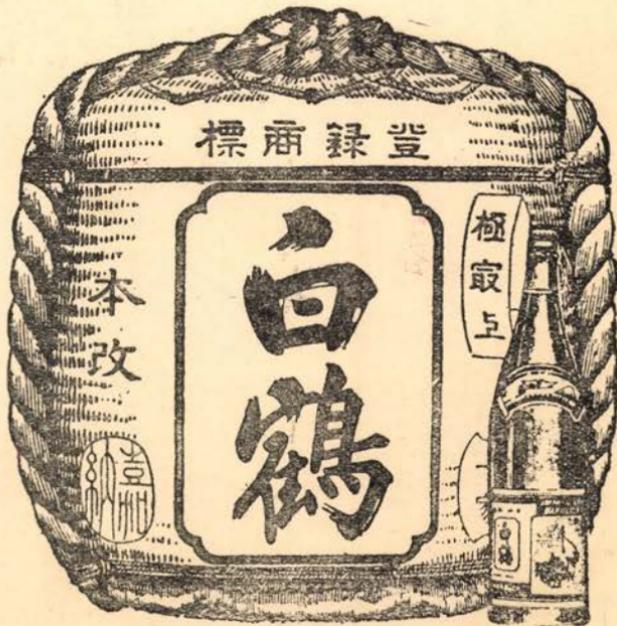


清 酒

白鶴禮讚

白鶴の瓶たまることたまること
 白鶴へみんな揃ふたい、話
 い、酒と言へば白鶴持つてくる
 白鶴を一本つけてからの事
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 當選に白鶴樽のままで来る
 貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘
 嘉納合名會社釀





川柳祭提唱

柳翁忌とは別に川柳祭をやりたいと思ふ。

全國各吟社が一齊に舉行するのもし、京濱聯合
京阪神聯合と云つたやり方もい。

兎に角、川柳の正しい認識を社會へ植付ける運動と
してやりたい。

具體案はこゝでは縷述しないが、今よりも一層川柳
を殷盛に誘導する精神の下に大々的に川柳祭が行は
れることはのぞましいことである。(路郎)



川柳雜誌第十二卷第五號目次

文苑

武玉川 篇研究(十三)

梅本秋屋の森子省二魚(三)

北平景勝遊記

大島濤明(二)

評月街の高臺

西田艸樂(六)

明治以後の川柳年表(三)

西島丸(四)

川柳祭提唱

麻生路郎(一)

高知縣安藝郡の川柳村

山雨樓記(五)

創作

近作柳樽

麻生路郎選(四)

川柳塔

麻生路郎選(元)

粒々集

鞍馬、柳秀、東魚(元)

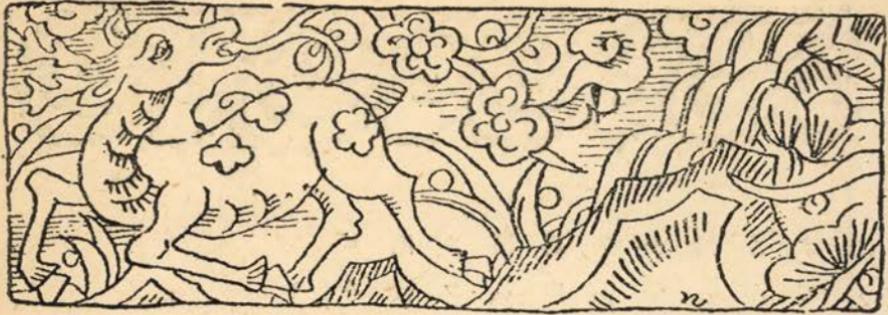
岩崎柳路氏夫妻觀迎會

毛利九波記(四)

一路集

手拭

橋本綠雨選(吾)
明石柳次選(至)



各地 柳 壇

路郎、紳樂、汀柳、整理 (五)

ア・ラ・カルテ

馳 ごとつこ 吉田 水車 (四)

子供に謝る 山本 喜山 (四)

海 老 天 岡田 某人 (四)

どうして八本の手が動いて
又元へ戻つたかといふ話 濱田 久米雄 (四)

たばこ人相學 辻 いの助 (四)

滿洲旅の思出 森 半 壘 (四)

人形のなげき 竹内 機見女 (四)

日本語を習ふ 岩崎 柳路 (四)

川柳家戸籍調 緑 雨 (五)

編輯の窓 汀 柳 (六)

題 字 楢 重 表 紙 繪 路郎、合 作

本社関係の人々 上沙町から 汀 柳 (四七)

..... 表紙 繪 路郎、合 作



てん・てん・てん・雨だれ退院へる夢みてた
だまつて女と春の驟雨です

寶塚に行く

寶塚おもちやのやうな人とあひ
月給を思へばにぶい二階の灯
性格がにほひシエストフ集を持ち
大阪が近く案山子と冬の空
たまさかに來て甘酒を強ひられる
春の風母の白髪の上を越え
更生の意氣で散髪屋と別れ
分譲地世間の金の片寄りぬ
地突きの唄も春からのもの

春潮 満々

小半日汽船は向きを變へただけ
離縁したタンスの跡が淋しいね
見返してやりたい汗の鹽辛さ
洋装が似合つて女給髪を切り
エスカレーター降りる方には友が居る

登ヶ池

静太

神戸

同 九葉

同

同 久米雄

東京

同 摩耶火

竹原

同 芳泉

大阪

同 墨州



横柄に云ふ身となつて肥えてゐる
 寄り添へば案外低き女にて
 戴いて呑む盃にむせるなり
 慢性と云つて重曹呑んでゐる
 靴はけばサラリーマンの音がする
 葉櫻が好きで淋しい妓に好かれ
 新妻にまだ喰ふ顔をみつめられ
 参列の老將軍の服の皺
 巡禮を話あいての田舎道
 片田舎藝者落ち目の夜を更かし
 母心何時か涙の落ちたまゝ
 子を二人持つた正月寒いなり
 いつも歸る道を酔つてゐる
 上役の笑談みんな手を休め

阿蘇登山バス

案内に小唄もまぜるバスガール
 手内職やれば盗電やれるなり
 さあ酔がさめないうちに寝るとする

竹原

同 都子

東京

同 佐保蘭

尾ヶ崎

同 観月

各右屋

同 世香

今治

同 曉童

大阪

同 利生

高知

同 珍景



卒業の娘ほろほろ花に似る

仁川

可宵

滿洲へ旅す

風呂へ行く馬車滿洲の氣分なり

咽喉佛逆剃りなれば我慢する

大阪

氷炭

草餅が食ひたくなつた野良の色

忘れもの養子はきつう恐れ入り

同

同

靴磨き更生といふ顔でなし

皆生温泉にて

ながし目のきれいな妓大阪辯

同

水客

風邪ひいて良い縁談をもつてくる

獨り者戀の尻拭き頼まれる

大阪

沐天

その當座緋の亭主火を起し

釘抜に小僧呼吸を見せてゐる

神戸

吉左右

朧月ふいにかられる煙草の火

受験苦の子の脊洗ふてやる日あり

姫路

同

重役の押しの一手にひざまづき

金網の中でも生きるものは生き

臺中

同

顔洗ふ水があふれるのもうれし

同

同



氣儘さを異性へだけはかくして
 小康の目先へベルシヤ猫が来る
 唄歌ふ文句失戀してゐるなり

笑奴さん病床に臥して

皆んな出てわびしく一挺残る箱
 病める兒へ財布のまゝを持たしとき

許婚に

いひなづけ逢へばこゝろの足る二人
 悲しきまでの情慾をそゝる髪油
 心死し雨の音さへせまり來て
 熟れぬ少女の肢體へ青き麥の風
 なつかしい帯締めてゐるお祖母さん
 病院の庭にすく／＼伸びる松
 音もなく病院へ吹く風があり
 長火鉢手相の事を思ふなり
 還境をそのまゝ白髪見せてゐる
 争ひに天地の神は第三者
 のみ込んだ睡商談がきまるなり

大阪

松江

京都

竹原

壺ヶ池

今治

名古屋

大阪

あや美

同

雛千代

同

白英

同

同

春帆

同

流之介

同

小松

同

嵩喜固萬

同

天國

同



岐れ道別れて歸る花の冷え
 春の宵君が自嘲を聞かうとは
 たしなみにに妻の整頓した姿
 運命にされて牧師の宅を出る
 ベストテンそれでもひとり美人居り
 それもそうだと人の好い慌てよう
 ねんねこを着てる男にある悲哀

從弟妹の婚約

くすりゆび幸福感に光るなり
 鮭を焼く匂ひ子供を叱る聲
 思惑が外れて春の草に寝る
 スケートが巧い女のアクセント
 呼鈴が紹介状へ響きすぎ
 石蹴つてまひるをぼくの影とゐる
 蝕まれゆく希望へ散つた夕ざくら
 朝飯がうまく船場で厚司きる
 特價品おつかひ物を思ひ付き
 娘を賣らむ話、春風がふいてゐる

今治

輝親

高知

同星水

大阪

同牧人

今治

同紫陽

京都

同丁路

高知

同翠山

豊ヶ池

同公平

大阪

同はるを

同義風子



一年のゴールよ腕をこまぬいて
 今泣いてゐた妓にネオンふつと消え
 しんとした話を笑ふ割烹着
 逢ひに行く靴の先まで紙でふき
 ビル配に男も春はねむいなり
 謙遜をそうかときけば淋しがり
 酒煙草こんどは何を禁めるのか
 少し賣れ出すと近所へ同じ店
 春が来て又春が来て職が無く
 宿直の鏡ゆがんだ顔が見え
 ふと見れば妻の茶碗は小さいなり
 ため息が白くのこつた硝子窓
 物を喰ふさみしい姿みられたり
 十二時間目の靴の紐とく
 月給がはつきり云へる友を持ち
 たそがれにまぎれて泣くも初奉公
 チヤルメラを聞くともなしに旅疲れ
 資本家もぶろもロシヤにくたびれた

東京

同
史葉

大阪

同
寒草

愛媛

同
孤鶴

大阪

同
菊路

鳥取

同
法泉子

釜ヶ池

同
六朗

今治

同
都留逸

奈良

同
双亭

大阪

同
自由郎



マドロスの父が歸つた夜の騒ぎ
 何もかも捨て、家郷に嫁をとり
 ダラ幹の拳が力む應接室
 沈んでる君の瞳に戀があり
 全快と共に櫻がほころびる
 嘘知つて居て大阪の飯の味
 陳情團又東京の酒を飲み
 妄想が父の墓標にぶつつかり
 交際の激しい頃の戀が出來
 バツトの灰惱み疲れたように落ち
 おろがみまつるうなじへ松葉散りかゝり
 太陽を知らぬをんなのウキスキー
 逢へばすぐ手が肩に行く君と僕
 行商へ溜息が出る灯がともり
 このあたり川一筋の和やかさ

實業教育五十周年記念會より賞を受く

命ある間にはよい事もあり
 内務大臣と同期は不倖

竹原

大阪

神戸

松江

神戸

松江

大阪

高松

同

呂烈

同

清美

同

楚堂

同

野生

同

天風

同

冬生

同

不二夫

同

柳夢

同



ジヤーナリスト社長と話すに無禮すぎ
 かすみから船が聞える 隠岐の宿
 贅澤な汽船で碧い 眼の花見
 いきさつは預りにして通夜の席
 はるかぜに土筆はエロのない姿
 猪狩へ百姓一揆ほど出掛け
 母さんのかたみが似合ふ姉のとし

友南洋へ旅立つ

ゴム園にのびる日本のはたじるし
 愛の巢が傳令式にわかかつて來
 失業の思案の末の巴燒き
 足袋ぬげば爪が延びてる彼岸前
 行樂の目に禁札の白々し
 めさましの後の五分の夢樂し
 春の宵口を歪めて履歴書く
 淋しさを持てば詩人とか云はれ
 突きつめた心へ汽車がとほるなり
 子の無い淋しき炬燵の灰を捨て

松江

山川兒

大阪

同 世間音

八束

同 外人

大阪

同 美代路

大和

同 翠峯

大阪

同 素月

奈良

同 葉魚

神戸

同 勝太郎

大阪

同 満潮

天養神歌ノ



自轉車で来て許嫁すぐに去に
 ぐつすと寝られて明日のある生活
 ネギの香の強い日向へ母と子と
 東海道米原だけに雪を見せ
 下り汽車關西辯が巾をきき
 黒髪が弾けて姉さん嫁にゆき

三笠山燒(友と飲む)

盃へ明りを映し山燒ける

血を略く

おろくと血のたんつぼをのぞいてた
 一錢で足りる子供の下駄が鳴り
 失業へたゞ働けといふ世間
 追憶へジツト見つめた猫のかほ
 連立つて行けば座布団足らぬなり
 世の事のはりこの寅が首を振る
 鏡臺へ無念無想の女居る
 スキーには別に貯めてるエネルギー
 世相には不關焉とほりの鴨

今治

大阪

奈良

同 流 汀

同 朱 椀 坊

同 青 柿

同

一 呂 香 淋

い の 助

凡 の 愚

え い を

木 通

不 二 號

東京

尼ヶ崎

今治

神戸

大阪

島根

大阪

名古屋

大阪



小間使婦人雑誌の理屈云ひ
 夕飯へ東北の事思ひやり
 腑に落ちぬまゝ末席は酒にする
 思ひきり實家の炬燵に足をのべ
 白い齒を見せれば女甘くみる
 課長より古參が恐い新入社
 用のない日の灰皿はあふれてる
 此の頃は親も忘れた夫婦仲
 スローモーションで重役席につき
 晝の顔女給無口で居るのなり
 病床に林檎の色をうらやめり
 片身分け鍍金の眼鏡とはかなし
 呑んでく騒いで呑んで春の宵
 かくれてる氣配仲人ほめちぎり
 一升瓶さげてぶら／＼春の人
 簾入の女中タクシー横附ける
 戀有りし記憶の街の雨を行く
 呑んで呑んで明日を忘れた日もありし

金澤	同	同	同	大阪	伯耆	刀根山	大阪	岐阜	大阪	愛媛	同	大阪	竹原	大阪	名古屋	尼ヶ崎	松江
緑水	都會人	雅星	哲平	清彦	小判	沙門	力夢	飛春	梢雨	草樓	歌都路	千鳥	蛙庵	時雨浪	三八朗	喜子	笑鬼



母親へ禮も云はずに病臥する
 慰藉料を取つた女の晝寝かな
 凶作がぬらせた紅と白粉と
 師が賞めてゐると他人に聞かされる
 盆の上薬瓶の鳴る冬二月
 和尚の欠伸へ本堂が冷へ
 菜を洗ふ流れを裏に持つ八百屋
 ビクニツク帽子の菜花しほれてる
 耐へてゐる強さへ妻と子がする
 美しい消へた夢追ふ瞳のうつろ
 牛の影濃く春風のそよろ吹く
 勝馬の豫想を立てるバスに揺れ
 賞めきつてそれから使ふ課長なり
 肩書のために顔出す焼香場
 春風の風かあるい咳をさせました
 靡かせる爲の財布を開けて見せ
 ながしめを平氣で見返す様になり
 勞働の肩をほめてる仕舞風呂

名古屋	泉北	名古屋	蟹ヶ池	奈良	蟹ヶ池	高知	大阪	神戸	石川	十三	大阪	鳥根	蟹ヶ池	高知	札幌	高知	大阪
長	美	車	ま	千	錦	白	坊	謙	秀	琴	紅	章	ス	眠	吉	柳	星
樂	千	前	さ	哇	雀	烟	茄	藏	峰	泉	桃	泉	ム	花	雄	翠	輝



病院にて

働かず貰ふ銀貨がまぶしいよ
 草かきの男の髭が伸びてゐる
 優しみへ林檎の皮のほそく這ふ
 演習の斥候柿を一つもぎ
 地下鐵はこゝから這入る春の風
 世をすねた顔へ粉雪が散りかゝる
 春の陽を浴びて金魚が泳いでる
 菜の花が村の平和のやうに咲き
 想ひ切り泣こうと海へ來て忘れ
 静かなる雑踏見せて純喫茶
 ツルハシをふる人生に酒があり
 飲む様になつて松江が狭すぎる

登ヶ池 澄魚
 岡 萬太郎
 大阪 鏗位
 尾ヶ崎 文月
 刀根山 正文
 大阪 苦掄
 堺島 馬占山
 阪 南星
 札幌 米三郎
 十三 嬌兒
 今治 繁水
 松江 ワツパ

ハイロツト欄に就て

正しき川柳の強化に努めて來た本誌「ハイロツト」欄の擔當を盟友川上三太郎氏が快諾されたことをお知らせする。入門式でなく讀物本位に執筆するとの意圖を洩らされてゐるので奇才縱横の麗筆が七月號以後の本誌上に躍動するであらう。氏の尖銳評を期待される人々の投句を募る。(略)

課題「わが子」一人一句——締切五月廿日、發表七月號投句は本社事務所宛

粒々集

富士野鞍馬

お通しで飲んで此頃忙しい
お通しも女將の膳も同じもの
慶應へやうやく入れてほつとする
春風に三萬噸の船の旗

長崎 柳秀

頭痛持測候所程あてなるなり
操までけがす金とは知らなんだ
算盤を持つて戀する年になり
働いて呉れる娘の下駄を干し
就職へをい酒を出せく

淋しくも立つた姿は親に似て
満腹のかけ聲で立つ父の膝

柳風スポーツ

森

東魚

六感でキヤツチファウルへ追ひすがり
練習の外野の肩は物を云ひ
劫負けのかたちファウルで打取られ
はり倒す様に審判アウトにし
コンバスの愚痴は國際レースなり
棒飛びは越すと奈落へ行く姿
手ほどきに眼鏡が飛んで弓に懲り

中村吉右衛門氏に寄す (二句)

弓勢に舞臺と別なジワが来る
三振はこれ音無し of 構へなり
牽制にビツチ、ウナくなども見せ

あるは、ついでに、おぼろ

一日のぼろ、金う

くり、おぼろ、ゆ

風、おぼろ、ゆ

秋、おぼろ、ゆ

連、おぼろ、ゆ

おぼろ、ゆ

武玉川二篇研究 (二三)

寛延四年秋 江府 三丁目 万屋清兵衛板

(398) 夜泣一の屋根を見廻て寝

省 二 夜泣は夜鳴、夜啼。夜中に鳥が屋根でなくのは、異變ありと世俗いふ。故に氣に掛り、家の四周を見廻つて後ち就床する。

東 魚 夜泣は小兒の夜泣きの方であらう。おびえて夜泣をするので、怪しいものが家の棟にでも、居るのではないかとの心持ちで見廻るのであらう。

秋の屋 江戸時代の人は、雞が宵啼をするのは、火災の前兆だ、迷信したもので有るから、近隣の家の屋根より、煙でも揚りはせぬかと、見廻つてねるといふのである。

省 二 夜泣を所謂夜驚症とも解してはみたが、夜泣を夜啼の意に用ひられ居る場合もあり、其儘に採つた。兩説どちらに

も通じはする。

(399) 鮎くへごさそひ人もなく鶉鳴

東 魚 秋の深くなる頃、最早鮎も所謂さび鮎でくふ人もない、河邊の草原には鶉が佗しさをなくと云ふので、玉川邊の武藏野の趣ではないかと思ふ。——再考するに、近江の玉川は名所六玉川の一つで、鶉の名所とされてゐるから、その方かも知れない。

秋の屋 近江の野路の玉川には、鮎は棲息せぬはずであるから、玉川の句ではなからう。鮎をくひに行かう、と誘ひに来る人もなく、只叢に鶉のなくのみであると、心に淋しく感ずるのだと思ふ。

省 二 野の鶉の聲はよいものだ、その頃、食ひたらで遊びたる鮎の料理に、誘ひ人も來ない。

梅 本 秋 の 屋
森 東 魚
蛙 子 省 二

(400) 出舟へ見廻住吉の禰宜

東 魚 海路安かれと、出舟へ住吉の禰宜が出張るのであらう。見廻はミマフと讀ますのであらうか。

秋の屋 住吉は海上の守護神であるから、出船の時に、その禰宜がくるのであらう。

省 二 〓 ミマフと思ふ。住吉は句材に、よく採用される。

(401) 枇杷の花 千疊敷はねかし物

省 二 〓 千疊敷を使用する事は、いつもありはせぬ。ねかし物の氣味がある。「苦しも咲しもわかす枇杷の花(太祇)で派手でない。花の中のねかし物かもしれない。對照文の句。——千疊敷を咏むだものが武玉川には、猶々見出される。

東 魚 〓 千疊敷と云ふと宮島を思はせるが、これは單に廣大な座敷とみてよからう。枇杷の花咲く多深い頃は、宴會もなくなるので、あたら廣間もねかしものであらう。

秋の屋 〓 枇杷の花と千疊敷、餘り面白い對照ではない。外に適切なものがあるだらうに、此句の作者に働がないと思ふ。

(402) 又降る雲に鮫鱈を吹く

東 魚 〓 吹くは門に釣してある、(小料理屋などの軒下に)、鮫鱈を雪風がふきつけると云ふ意であらうか。

秋の屋 〓 「鮫鱈の口に降込む霰かな」といふ、誰やらの俳句と同想で、これは雪風が吹込むのである。

省 二 〓 鮫鱈の唇ばかり残るなりで、全部が鍋となり冬季に美味。「又」が充分感じを出して居る。蕪村には「雪の河豚鮫鱈の上に立んとす」と。が鮫鱈では命を棄てぬから安心。釣切りとする。

(403) 天秤棒に遣ふ手はなし

東 魚 〓 棒は色々流儀もあつて、様々な手があるのだが、天秤棒は肩へ當てる一ト手丈だけといふ、諧謔であらう。

秋の屋 〓 天秤棒で相手を殴打するのは、無手勝流であらう。

省 二 〓 幼時祭禮の行列中に、「棒の手」を見て興じた。此天秤棒は前説の如くに興する事が出来る。(無關係の句であるが「吞む關守に棒の手はなし」(ム六)。

(404) 螢か好キて氣の抜た晝

東 魚 〓 螢の光る夜が待たれるので、晝間は變哲もなく、手もちなく居るのである。

秋の屋 〓 螢が好きとは、少し變な言方である。

省 二 〓 禿など好きであつたらしい句もある。晝の螢はしかたのないものだ。「晝買った螢を隅へもつてゆき」。

(405) 所化うきくと九十臺射

東 魚 〓 楊弓であらうと思ふ。百本の矢數を既に九十以上當りが出て、有頂天になつてゐるのではないか。芝の僧など神明の楊弓場で、遊んでゐるやうな場合が想像される。

秋の屋 〓「九十臺射る」とあるから、楊弓に相違ない。例の山塔の遊僧である。

省 二 〓「九十臺射る」の他の例句を、一寸探してみたが見當らなかつた。楊弓と思ふ。

(406) むらさきに合ふ江戸の根性

省 二 〓江戸紫體讚句は多い。紫は男の國の水で染め、男の根性と得意の態。

東 魚 〓江戸ツ子の得意満々たる氣分が思はれる。根性の字が据え得てゐる。

秋の屋 〓紫色は禁色などと稱して、最上の染色とされてゐる故、男性義を誇る。江戸子の意氣に合ふ、と詠んだのであらう

(407) 下女は男をほめる小つゝみ

省 二 〓鼓方は意氣なものだ。小鼓の男の姿を噂して、ほめるのであらう。「末の娘は小づゝみを譽」(ムセ)。

東 魚 〓前出の「よいをとこにも二通り大つゝみ」と、對照される。

秋の屋 〓賤しい下女の耳には、小鼓の音調が聽分けられず、只其の男振りの好いのを譽る。

(408) 握りこぶしは母の奥の手

東 魚 〓最後の手段、よく／＼の事で拳をあげて、折檻するの、充分わからぬ。

秋の屋 〓父の奥の手は勘當敷。

省 二 〓母親の握拳などは、餘り見られない處だ。奥の手に相違ない。但、叩き得なからう。だが「死て仕廻へと戸を明け母」(ムナセ)などの氣強さもある。

(409) 二親有て夢を忘るゝ

東 魚 〓兩親健在であり、何の心を煩はす事なく、夢などみた事もない程、安らかな日を送つてゐる。

秋の屋 〓聖人に夢無しとやらで、心に屈託がない故、夢見る事を忘れるのだ。

省 二 〓お説の如し。二親揃つて居る中は、親の有難さに馴れて、夢さへみぬ。

(410) 三味線引に山下の埃

東 魚 〓上野山下には、大道藝人が多く出てゐたから、この句があるのであらう。

秋の屋 〓輕業などの見世物小屋の光景であらう。
省 二 〓賑ひが察せられる。

(411) 飛脚の膳は目の前て盛

省 二 〓目の前で盛つてやる。急いで食べて出掛ける。飛脚はスピード的であるべきだ。面白し。

東 魚 〓遠く座を下つて給仕に控へてゐたり、次の間へ盛り立つたりしたのは、飛脚などには不向きである。句に何と

なし可笑味がある。

秋の屋 〓 これ等を、早飯、早糞、早走りと云ふ。

(412) 呑めと斗は主の和らき

省 二 〓 充分呑むだら宜いだらうと、主人の言葉。主従の親和。場合は色々にとれる。

東 魚 〓 遊びに行けと迄は云はない。マア一杯やれといふ主人の温情。

秋の屋 〓 夷講の宴會とも解釋される。

(415) 立のまゝにて選ひ約そく

東 魚 〓 客分で來てゐる 婚約のなつた娘。「裸でといへば娘は可笑がり」の口で、何も支度は望まないが、當分來て客分であるて呉れといふ場合であらう。

秋の屋 〓 先づ客分にして、後に嫁とするなどは、上流社會にはない事で、中流以下に行はれるのであるから、支度の無い者が多いのである。

省 二 〓 「立のまま」はその儘。ふだんのままの謂。遠くて近きは男女の仲。多分近い約束とならう。

(414) 庭のたき火も知て居ル良

省 二 〓 吉原では三ヶ日庭火を焚いた。「荒むしる孔雀の下りる初紋日」——デ正月に庭竈と稱し、「庭竈牛も雜煮をすはりけり」(其角)とある。

東 魚 〓 「庭のたき火」は大晦日にも行はれたらしい。柳花通

誌に「大晦日は倡家にて庭火を焼く事古例なりしが、今に京町海老屋吉藏方は其形残りて、かならず庭火を焼く」。又、誹諧通言に、「庭燎、大晦日の夜忘八にてたくなり」とある。これは庭竈とは違ふらしい。庭かまどは前説の如く、荒庭に座して雜煮を祝つたと云ふので、この句にしてみれば何れの場合ともとれる。

秋の屋 〓 「庭の焚火」は前説で了解されるが、「知て居る顔」が判明しない。庭燎を焚く場に来る人々は、顔見知りの者ばかりだといふ意歟。

省 二 〓 左様であると思ふ。——贅筆になるが、風流徒然草大晦日の條、家毎に庭火たきて、餅蛤焼など此頃江戸にはなき事を、よし原の内にはなほすることにしてありしこそ賑なりしで、「夜神樂や庭燎にみゆる杉の丈」(津寛)は冬季の庭燎の句である。大言海に、庭火、門内屋前ノ庭ニテ焼ク薪火。多クハ御神樂ナドノ時ニ禁中ノ庭上ニ焼ク篝火ヲ云フとある。庭かまどは地火爐の遺風であらうに謂はれ、胸算用に、奈良中が仕舞うてはや正月の心、家々に庭のろりと、釜かけて焼火して、庭に敷物して、その家内旦那も下人も一つに樂居して不斷の居間は明けておきて、所慣はしとて輪に入りたる丸餅を庭にて焼き喰ふも賤しからすふくきなり、とあるが各地に行はれたもの、「野炭たくや安房や上總の庭かまど」などがある。「知て居る顔」も通ずる。

(415) 戯て退く人を見限る肴賣

省 二 少し臭い(腐敗氣味などと、躊躇するお神さんを、肴賣は相手にせず見限つて行つてしまふ。

東 魚 二 なまぐさいのが嫌ひな人なので、別に魚が古いといふ場合ではない。

秋の屋 二 腥いのを嫌ふ人ならば、初より魚は嗅ぐまい。これは魚を嗅いでみて、古い魚だと認めて立退くのである。そんな人は魚賣に見限られるのだ。

(416) か、り舟鷗の中に銭の音

東 魚 二 ひそかに舟博奕をやつてゐる場合であらう。廻りを無心の鷗が飛んでゐるのである。

秋の屋 二 「枯芦の中に怪しいやねぶ有り」といふ句の如く、船中の賭博開帳で、隅田川の光景。

省 二 中七の景観により、興趣をよぶ。

(417) 袖から上のすくなき奈良の京

東 魚 二 奈良は木綿ものが良いので、且、質素な土地柄故、この句があるのであらう。

秋の屋 二 奈良晒と稱する麻織をも産出する。古京であるから住人の衣服も自然質素であらうと思はれる。

省 二 某氏の川柳書に、奈良の名物として、晒木綿と記されて、「ねむつたい綿柄はなし奈良晒」などが掲げてあるが、奈

良晒は麻布だ。「さらし屋は江戸にゐるうち朝寝する」で、江戸に販路を開拓したのは、大都會であつたによるけれ共、品質が優良で幕府の用品となり、名聲を高めたから、一般の需用が殖へたのである。近江の方は近江晒ともいふが、普通は近江麻布と呼びで居る。

(418) 峠の家の尾も鱒もなし

省 二 尾も鱒もないとは、至極お手軽簡単な構造の謂、交も繁くない峠の家の事だ。ほんの實用向きなのである。

東 魚 二 見すばらしいと云ふ意であらう。

秋の屋 二 堀立小展のやうな一軒家で、門も無ければ別棟の納屋なども無い、といふ意である。

新緑の清々しいお姿を
是非！

工藤清寫眞館

大阪市西區土佐堀船町一四
肥後橋南詰昭和通西南側
電話土佐堀五五〇番

高知縣安藝郡の

川柳村

公稱 の如く「高知縣安藝郡川柳村」で郵便が配達されると云ふ、羨ましい話題……！……川柳村は高知市と室戸岬との真中にある片田舎の村であるが、文人

としても一かごの双川宗匠富田幸次郎氏や黒岩涙香氏を生んだ村だけに文筆風流の盛んな土地。

川柳づくめ それが、縣下にいとも流行してゐる川柳熱にすっかり共鳴して、とても朗かな川柳村の出現となつた。十年前高知の中澤濁水氏が手ほごきしたのがことの起りで、今では一村四百戸を川柳熱で風靡。お百姓も、學校の先生も川柳の心得がなくては實際もできないといつたほどの勢ひ、村の川柳會を牛耳つてゐる中川星水君は職業が菓子屋で名物のつぶを賣つてゐるが、門口には「川柳つぶ」の大看板に「頬張つて出る門口へ五つ紋」と

大書して早速川柳を商買の廣告に利用。出合頭に川柳で挨拶を交すといつたらゐは茶飯事のこと。

川柳劇 村では年一回、農村青年の娛樂に村芝居をやる。一昨々年から星水君が同人一味を引具して川柳劇を上演、「ちんごん屋生活よりも派手に生き」「故郷へ女房をつれて久しぶり」など同君の作を脚色しユーモア氣分たっぷりなところで大向うの喝采を博してゐる。

川柳碑 昭和八和六二月村の入口、松榮山弘法大師堂境内へ高さ一丈五尺の「川柳追徳の碑——川柳村」を建立、柳友多数參列の上その除幕式を舉行、續いて記念會を催した。

尙川柳チームを組織し各種競技會へも對抗する等、斯くして村民に川柳を認識させつゝ樂しませ、ごんな歡送迎でも川

柳村の大旗を押立て、全く川柳化せうとする意氣込みである。

句會 は毎月三回星水君宅で開催、いつも最も仲のよい二十餘名が集まるが、會員の勸誘に拍車をかけてゐるので、川柳村と附近町村を合せて六十名位集ること珍らしくないと云ふ素晴らしさ。

本社同人の竹内機見女さんも一緒に句會をされた事があると聞く。

氣焰 星水君曰く——本當の平和、圓滿は川柳にあるといふ信念のもとに私は村を川柳化する決心であります。川柳村即ちこの世のユートピアです。川柳のあるところ朝も夜も爆笑なんですからナ。ごんな勞苦も川柳氣分でかかれれば忽ち解消されます。それで川柳同人はとても勤勉で仕事に精一ぱいですぞ。それでいつもニコニコだから全く超世間的心境なんです。村長も村會も川柳黨に引入れてきつと、名實ともに川柳理想郷を創造してみますよ。(山雨樓記)

傳説の神話に
おかしさは粗服
まとはは侮られ
孤鶴
右の句が「わらひたくなる」
「おかしさは」
なぞの句語を以て、ユウモアの句に擧げるの
では無論ない、又右の句が、代表的のユウモ
ア句として紹介するほどの句でない事も斷
つて置く。私はつい此の句から、或る感想が
生れて來た。それは、ユウモアの出る人、ユ
ウモアの解せる人生は幸福だといふ事だ。單
に川柳家のみでない。ユウモアは人生の息抜
だからである。起きて、食つて、働いて、泣
いて、苦しまなければ過せぬ人生に、ユウモ

月評 街の高臺

西田 艸 樂

ユウモアの句に就て

月給をわらひたくなるビル窓 七葉
おかしさは粗服まとはは侮られ 孤鶴
右の句が「わらひたくなる」「おかしさは」
なぞの句語を以て、ユウモアの句に擧げるの
では無論ない、又右の句が、代表的のユウモ
ア句として紹介するほどの句でない事も斷
つて置く。私はつい此の句から、或る感想が
生れて來た。それは、ユウモアの出る人、ユ
ウモアの解せる人生は幸福だといふ事だ。單
に川柳家のみでない。ユウモアは人生の息抜
だからである。起きて、食つて、働いて、泣
いて、苦しまなければ過せぬ人生に、ユウモ

アなる安全辨がなければ息づまつて了ふであらう。

一月月々々として働いて、得る處の月給なるものと、資本主義の權化である様なビルの窓と對照して見るがいゝ。何かの都合で粗服のまゝ人前へ出る時に受ける輕侮感を想ひ見るがいゝ、そこに當事者にユウモアの氣持の所有がなかつたら、世を呪ふか、自己を否定するか、爆發が自殺かの一步を踏出すより外ないだらう。ユウモアは大きな救世主だとも言へる。

腹立の箸を動かす手はやまず 小樓
工事場の活氣そのまゝ酒さなり 鳥人

集金に雨も嵐も平氣なり 星水

傳統といふものは怖いものだ。寶曆の川柳子が叙事叙景をものして、何處かにユウモアを湛へてゐた。此の三句がそれである。句に表はれた人物の動作そのものを叙しただけのものであるなれば、川柳にはならないので、句の裏面にチラと覗かせたユウモアは寶曆以來の川柳家に傳はる遺傳であらう。柳權初篇近い作家は驚くべき達觀を以て、世を眺め、如何なる差迫つた人事にもその達觀の餘裕を見せてゐる事は、見逃し得ざる必須事である。私はやゝもすれば、近來の川柳家にその遺傳が薄れて行きそうなのを非常に悲

しく思ふと同時に、前掲の様な句に接するとこよなく懐しく思ふのである。人事の繁銷の渦に巻き込まれてしまはずに、その中に立つて、頭だけは上へ出してゐるのが、川柳傳統の一つの態度であつた。

殊にユウモアは、縛られない心、自由な心境に立たねば湧起するものではない。ものに囚はれて齷齪してゐて捉へ得る 珠玉ではないのである。

靴下の穴侮れぬ程になり 花鳥

病院を「あは」と住むとも思ひ 星輝

痛められぬ心を以て、物事を微笑を以て眺め得る人には一生非常に大きな徳がある。そういう一人の一生には行く手には坦々たる道が開けるであらう。心が峻い人には、自然人生が峻しいであらう。快活に世を渡る人は常に快活さうに見えるし、陰鬱な心持の人は常に陰鬱な目を自ら招く順序になつて行く様である。ユウモアの川柳も、快活な素直な人に多いのは争へぬ事實である。

處で、よく洒落を言つたり、機智に富んだ人に眞のユウモアの句が出来るかといふと大きく間違ひである。眞のユウモアも、矢張人格の底から湧き上るもので、ウイットなぞは

それから見れば遙かに下座に引下るべきものである。句會などで、一つの機智でもつて圖に當つた句がよく扱けたりする事は、その場は華やかに見えても、後からよく見ると、ほんとうにいゝ句はない。

ユウモアの句も苦勞をしめいて来た人といゝものがある。

座ぶとんで掃いて坐つて汚ながらり 春秋

四月號では特に擧げる句はないが、春秋君には面白い句が絶えない。

銀行の窓へ大きなお辭儀をし 豆秋

老夫婦お經の文句行つまつまり 同

別段取立てて云ふ程の事でないのに、豆秋君の句にはごことなく可笑しみが、先きに感じられる。あの眞面目くさつた顔で、あまり多く物敷を言はないで、そして言ふ事と仕事にユウモア味がある。豆秋君は川柳雜誌社のユーモリストであらう。

マネキンへ丁寧すぎる草ね様 いわを

かつて堺枯川氏が、内村鑑三は日本一のユウモリストだといつた事がある。私は實に感心すべき評だと思つた。ごちらも故人になつ

たのだが、内村先生は聖書學者としては日本では右に出る人が今でもなからう。死後、豫言者だと稱された巨人だつたが、眞面目この上ないキリストの教へを説いた。そして謹嚴な生活をして、あの理窟っぽい堺利彦老から日本一のユーモリストの名を貰つたのだから奇とすべきだが、事實先生の書を見るとなる程と背かざるを得ないものがある。

あのユウモア味の溢れた「吾輩は猫である」を書いた漱石先生なども、同型にはまる人であらう。そうだ、ユウモアといふ事はその眞面目さに徹した處にあるので、小説「草枕」にある禪寺の大徳の和尚が、手を拍てば何時でも鳩が寄つて来るかと思つて、夜とも知らずに手を拍いたあたり、實に茶目では出来ぬ滑稽ではないか。

今月の月評は、つまらぬ述懐めいたものになつてしまつた。そして右に掲げた句が必ずしもユウモアを主とした句とは云へないものであるが、何れも見逃せないユウモアを湛えゐる事は憚らず言ひ得るだらう。漫書川柳の程度のユウモアより知らぬ世間へ、専門外の雜誌にでも書きたい事を、氣の引ける思ひで専門家に見せる事になつた恐縮である。



川柳塔

路 郎 選

吉 田 水 車

鶴の軸背に仲人酔ふてゐる
よう知つてゐるけど其處は氣を利かし
滿洲の話南京豆の皮
カフエーは化けて出そうな灯しやう
えげつない話倦怠第一期
針山のもみの紅かさへ夕迫る
ネオンサインそれは質屋でありました
三味線の切れたをしほに話し込み
西田 艸 樂
荒れた手で居候様へ給仕に出

古物屋を呼んで今月家賃が出
才能の足らぬ自覺が淋しい日
お日様と相談づくで鉢の梅
一二丁浮氣封じに送られる
白い手がニユツと出て居た緋い夜具
早いとこ一本たのむ空模様
保険屋がこれだけあるか近火也
青木 史 呂
投げ出した足の先なる土筆
貧乏な男へ趣味が多すぎた
二時間も待つてゐる椅子の堅いこと

お前なんか死んでしまえと意見され
農夫黙々と花見の群れを見送りぬ
友情を賣るとはきみも云過ぎる
若夫婦ト一キ一漫畫見に出掛け

岩崎柳路

ゴマをいる音臺所の母は老け
パイプ掃除しながら妻のぐちを聞き

久し振りの歸阪(回リ)

度の強い眼鏡の君で初對面
大タクに圍はれて出る果太鼓
來て見ればネオンに映る繪看板
キャバレーの株式會社又一つ

岡田某人

酒桶へあつけらかんと陽があたり
さみしければ陽の射す方へ向いてみる
わかりよい言葉で云へば金が欲し
やきとり屋春で臙で賣れ残り

戀の馬鹿言葉のアヤを信じ切り
善人の證據のやうに出世せず

轉勤轉任頻りなれば

どこで生きどこで死なうと小役人

友人女兒を擧ぐ

地の神の妾女の兒が生れ

近況

公私共多忙噓もせにやならず

令息洋君を亡はれたる路郎師に

うらめしや紀州はすでに梅もなく

中澤濁水

吸殻を呑んだ蛙のおもしろさ
名士とはちがふ床屋の顔の額

西村明珠

日本に俺があるよな顔をして
保險屋が妾の家で斷られ
どこぞよいとこはないかと勤めてる
兄弟のキャッチボールに葱が折れ

病氣など知らぬ口からなくさめる
屋臺すし今度食ふのへ眼を落とし
ダンサーに疲れてますと断られ
お互ひにとはあまりにも見下げ様
就職をしたか此頃来てくれず

西 い わ を

雰圍氣が資本家とした腰を上げ
免職の荷物の生徒が運んで來
春の雨旦那の襟は油じみ
サーカスが退んだ空地の水溜り
武士道は斯う打込めと國士館
一晚の遊興で住む家賃なり

喜 多 春 秋

長雨の濕りものゝ怪灯にひそみ
戀女房アイと返事をしてくれる
額から咽喉へ女盛りを女房肥え
苦勞した母も盃一つ受け
かあちやんのしりつきむしでございます

のうれんのやうな男で味方なり

水 谷 鮎 美

僞眞珠女の眉のほそかりき
摘草の鼻のさきなる春の水
風車子のない夫婦にさびしけれ
腫をちてみゆることろのさくらいろ
前垂の大阪辯の眼のはやき

春の野球大會に母社より甲子園
放送係を命ぜらる(三月廿八日)

スキツチはOFFF六甲の春霞

大 鶴 喜 由

好きな人腹の立つ程無口なり
妻素顔どこか悪いかなど聞かれ

滿洲國皇帝奉迎

大昭和 大 康 徳 の 御 握 手

肩書が無心に行くに邪魔になり
金言の額が裸體にかわつてた
久淵を喜ぶだけで茶も入れず

三 鴨 美 笑

伯耆から出雲へは入る風にあひ
石段を下り切つた處へ鐘が鳴り
縁談を皆斷つて春になり

初戀の嫁く

想ひ出の櫻の花を見て居たり

病床にて

有閑なマダムにすつかりあまへて見

石曾根民郎

女給さん募集貼りにまわる辭儀
縁談がこわれかゝつた炬燵引く

荒井英賀夫

春寒し娘の寫眞二三あり
教育の程度を聞かれ淋しけれ
代書屋に恥をさらけて善後策
からめてを行けば女も弱いもの
火葬場のこゝにも櫻春をつけ

奥野 禿 山

名譽念試驗地獄へ子を落し
葬儀場その日その日をかたづけ
大阪へ着くとガソリン鼻を突き
麗かさブランコへ年齢忘れかけ
人形の手のものたらぬウキンドー

關 本 雅 幽

外套の肩も三ヶ月下旬なり

公子女へ

郊外に朝の鏡のうつくしき
處世術苦學だんくなまけだし

姫 田 夕 鐘

ヨイトコトンヤで春を掘つてる
思ひ疲れて酒にするなり

與三郎君の結婚を祝ふ

高砂家今宵の臍の置所

洋ちゃんを悼む

いゝお父ちやんの手を離しましたね

生田 翠 夢

女てふ名に諦めて牡丹刷毛

白痴にも似た美しさに惚れてゐる

人生の淋しさを知る金遣ひ

だまされて来た本心はうぬぼれか

朝田 新 水

西洋菓子みたいな女匂はせる

手放した指環信心らしうなり

藝だけの力で喰へぬ身とはなり

心願の肩へ嬉しい人が立ち

植山 九 天

一雄君長男出生

拳骨の握り工合も男の子

名匠の子としてかんなとぐ平和

不眠症三面記事をこわく読み

小説を妻臺所で真似るなり

伯母の死

柿の木の家に返事がないのなり

熊 谷 紅

給料日改札口で泣りかけ

額の字は読めず旅館の絹布圍

ご酒どすかおビールどすか京の宿

失職へあまりに髯が立派すぎ

曾我部 宵 明

小使に派手な過去あり隠し藝

脳病院窓から菜種見えるところ

病んで寝る子の耳の白さよ

病院の午後算盤の音がする

平井 與 三 郎

たからづかまるやまならはすなほこり

歸りたい心へ盃たまるなり
下宿屋が仲人さんであなどられ

弘秋君を悼む

出來のいゝ順に死ぬ酸素吸入器

市場 汐食子

賣上を子がちよるまかす歳になり

口止めに奢るエレベーターに乗り

晚鐘に花の一日暮れんとす

ふところを五月の風がふくらませ

江戸 みつる

腰の低さに商人と見られたり

GINZA・KAIKANへ

嘔吐器を備へ無茶酒吞ます氣か

小説を讀みつゝゲーム取られたり

電燈を上げたり下げたりする暮し

近 藤 勇

一人居の小唄もまじる春の窓

散髪屋で首筋からの春となり

後藤 青兒

無能力菊作る氣で戻つて來

昇給をすればキラキラ窓硝子

お話が盡きてだまると汽車も着く

宮岡 白峯

チヨコナント淋しく無賃乗車券

遊園地下駄ぬきすてたまゝ二人

轉宅へ女は瘦た聲で來る
尼 綠之助

カフェー街思ふた戀は落ちてゐず

作戦の一つ叱られに來る

町田 承春

算盤のはじきも鈍り停年期

アルコール漬のからだとなつて來た

須崎 豆秋

擧手の禮道頓堀はどちらです

自轉車で二號のとこへ廻るなり

明治以後の川柳年表

(柳誌柳書の部)

(その三)

西 島 ○ 丸

(書名、誌名)

(発行年月日)

(発行所其他)

おもくろだぬ記 第一號 (明治十五年壬午二月十四日)

東京京橋區木挽町鼓喧社發行、發行日記載のを得たれば再生す

粹の友 第一號 (同 五月)

東京本郷區湯島天神町三の三、粹友社發行、奥澤尙一編輯、狂句欄

滑稽厚釜集 第一編 (明治十六年癸未七月五日)

東京日本橋坂本町海老原喜兵衛出版、狂句欄

大和來佳詞 第三編 (同 十月廿九日)

東京神田區一ツ橋通四、松江堂發行、野村清吉出版、狂句欄

能舞子親釜 全一冊 (明治十七年甲申二月六日)

東京麴町區飯田町二の三四、嵯峨野増太郎發行、狂句欄

壽意多羅誌 全一冊 (明治廿二年己丑一月廿五日)

東京神田末廣町三五、書籍行商社發行、岡田常 郎編輯、川柳欄あり

粹人通客必携洒落の本家 全一冊 (同 上)

同上、近江八景よみ込川柳といふものあり、岡田は尾上菊次郎の父

明治新柳樽 全三冊 (同 三月二日)

名古屋若山文二郎發行、發行日記載のを得たれば特に再出す

情の戸 第二枚 (明治廿四年辛卯七月一日)

東京京橋區木挽町四の四、滿情社發行、狂句欄

佳句聯美囊 第一襟 (明治廿六年癸己三月十二日)

東京芝區南佐久間町、雅交會發行、狂句欄

- 物 識 天 狗 全一冊 (同 七 月) 僧正坊著・藍外堂梓、醉多道士序、川柳と稱し十頁とる
- 可 俱 談 娛 第一號 (同 七月五日) 東京京橋加賀町笑林舎發行、櫛の屋編輯、毎月二回五日廿日、菊判
- 羅 句 雅 記 第一號 (同 九月三十日) 東京芝南佐久間町二ノ十二雅交會發行、菊判
- 風 雅 新 報 第一號 (明治廿七年甲午 五月廿五日) 東京牛込區砂土原町雅學協會事務所發行、菊判、狂句欄
- 狂 詩 川 柳 古 今 狂 歌 大 全 全一冊 (同 九月二十五日) 東京京橋弘文館發行、琴の屋松風(五松園琴升)編後に求光閣より覆版
- 柳 の 栞 第一篇 (同 十月十五日) 同淺草新旅籠町柳風會(九世川柳の家)發行、五篇より柳風狂句の栞と改題
- し な さ だ め 全一冊 (同 十二月廿二日) 同神田鍋町井口松之助發行、菊判八十頁、日清戰爭の狂句
- 狂 句 柳 の 栞 第一號 (明治廿八年乙未 六月十九日) 柄井和橋(九世川柳)編輯、淺草柳風會發行、柳の栞四編にあたる
- 置 賜 柳 風 芳 名 錄 全一冊 (同 仲 秋) 無名庵の附記あり、中本和紙
- 柳 風 狂 句 の 栞 第一號 (明治三十年丁酉 七月十日) 東京神田裏神保町文錦堂發行(別世界發行所)狂句柳の栞改題、二號で終
- 第二回東洋文學會狂句浪花輯 (明治卅一年戊戌 三月) 大阪西區南堀江上通四丁目但立花通坂榮橋筋西入南側白川方東洋文學會
- 柳 風 狂 句 改 正 人 名 錄 全一冊 (明治卅二年己亥 十月二十五日) 東京神田井上書店發行、昇旭及柄井川柳編、横綫和紙
- 川 柳 難 句 評 釋 全一冊 (明治卅三年庚子 三月九日) 東京日本橋文祿堂發行、梅本鐘太郎著(柳花著と巻首に書く)、袖珍本
- 柳 風 狂 句 改 正 人 名 錄 全一冊 (同 一 月) 伊藤博文の題字あり
- 課 題 川 柳 狂 句 集 全一冊 (明治卅四年辛丑 十一月) 九世川柳主選、文運堂發行、中本和紙

へなづち 集 全一冊 (同十二月十三日) 東京神田新聲社發行、阪井久良岐著

花 か こ 第九號 (明治卅五年壬寅一月一日) 東京日本橋通四丁目春陽堂發行、菊判、狂句欄

狂句 の 栞 全一冊 (同六月十八日) 東京日本橋區本町博文館發行、鶯亭金升編、袖珍本

狂體句 の 栞 全一冊 (同七月二十五日) 同上

古今川柳三千題 全一冊 (同八月十八日) 東京京橋求光閣書店發行、狂風樓主人選、袖珍本

川柳 梗概 全一冊 (明治卅六年癸卯九月二十二日) 東京日本橋區金港堂發行、阪井久良岐著

川柳 大會 上下二冊 (同十二月廿八日) 東京本郷區本郷四丁目有朋館發行、太華山人校訂、橫長本

電報新聞川柳欄創設 (明治卅七年甲辰四月二十九日) 選者、阪井久良岐、新柳樽と命名

日本新聞川柳欄創設 (同七月三日) 選者、井上劔花坊、新題柳樽といふ

讀賣新聞川柳欄創設 (同末調) 選者、朴山人田能村梅士

類題川柳名句選 全一冊 (同七月二十日) 東京本郷區内外出版協會發行、藤波樂齋編

新柳樽 全一冊 (同八月一日) 東京本郷西片町内外出版協會發行、藤波樂齋編

獨習自在川柳入門 全一冊 (同九月二十日) 東京神田大學館、池田錦水著、大正二年十二月一日再版發行

川柳久良岐點 全一冊 (同十一月廿三日) 東京本郷區金色社發行、阪井久良岐著

三面子狂句集其一 全一冊 (明治卅八年乙巳一月八日) 東京神田有斐閣發行、岡田三面子著、砂研袋の小型を作り中に夫

- 分類評釋川柳名句選 全一冊 (同 三月十九日) 東京日本橋區如山堂書店發行、島崎松孳著
- やなぎだる 全一冊 (同 四月十五日) 東京本郷書院發行、巖田郷左衛門著
- 新編 柳樽 第一 (同 四月) 大阪小島六厘坊發行、矢車第三號に齋藤松窓記す、末調
- 新風俗詩五月鯉 第一號 (同 五月五日) 東京麴町川柳久良岐社發行、四十四年五月三の五で終
- 川柳 下 萌 第一號 (同 五月五日) 東京日本橋區蠟燭町下萌社、菊判横綴、休刊期不明、秋思さゆり
土筆主催
- 川柳 類 纂 全一冊 (同 七月二十五日) 東京本郷區内外出版協會發行、花園百樹編
- 濡乙鳥集 第十六號 (同 七月三十一日) 瀧川一蓑編輯、以文會發行
- 萬覺帳 第一號 (同 十月十八日) 東京京橋區南小田原町三ノ十、萬友會發行、清水三友編、三號で終
- 川柳 第一號 (同 十一月三日) 東京神田駿河臺柳樽寺川柳會發行、四十年十月廿三號で終、大正
六年大正川柳を出す
- 新川柳 抄 全一冊 (同 十二月七日) 東京京橋區銀座讀賣新聞社發行、田能村杯念仁編、袖珍本
- 家庭川柳 全一冊 (明治卅九年丙午
一月二十一日) 東京青山千駄ヶ谷鹿鳴社發行、角懸坊編、袖珍本
- 同 好 第一號 (同 二月十日) 東京牛込區區揚場町讀賣同好會發行、窪田而笑子編輯、七號で終菊判
- 葉 柳 第一號 (同 六月) 大阪西柳樽寺發行、新編柳樽の改題、四十二年五月號にて終
- 類題評釋古今川柳名吟集 全一冊 (同 八月十日) 東京日本橋區魚住書店發行、小林紫軒編、小本
- 川柳 名 句 集 全一冊 (同 九月十二日) 東京淺草盛林堂發行、小林紫軒編、小本、十月七日發行分もあり



北平景勝遊記

—川柳と歌から—

大 島 濤 明

×北平に入る

天津へ出張の序でを利用して北平見物と出かけた。

一人旅程つまらぬものはない、車中で大連の観測所長草間氏と知り合ひ一所に見物する約束したので、いくらかの旅愁を拭ふことが出来たと思つてゐたら、北平驛に着いてみると草間さんには二、三出迎ひの人があつたので、その組に加はることは却つて草間さんに御迷惑かも知れねと考へたので一人で處々見物することにした。

着いたのが十二時なので先づ旅館に落ち着くべく満鐵經營の扶桑館にゆき晝食を命じた、そこへ挨拶に這入つて来た婦人（女中取締）は思ひがけなくも新京満洲屋旅館にゐた女中頭の末吉ともゑさんだつた。

「ゑらい珍らしい處で遭ふもんだな何日来たんです」
「先月の二十六日に参りましたんですよ」

それから新京を去つた事情だの、大連に暫く居てこつちに来た話だのをきいた。

「あなたは御見物ですか、そんなら妾もまだ来たばかりで見物はどうも致しませんからお伴させて下さいませんか」

「そりや願つたり叶つたりだ、僕一人で歩いてもつまらないがな」と思つてゐた矢先きだから
そこへ扶桑館のマネジャー寺島さんも来て
「私もともゑさんと一緒に先月来たばかりですからお伴しませう」と急に同伴者が殖ゑたので一段と元氣付いたのだつた。

×萬壽山

北平市街の西一軒の處にある北平隨一の名勝である清朝猶盛んなる時代、皇帝の離宮として贅を盡した處、殊に西太后全盛の頃には北洋艦隊擴張費の過半を投じてこの萬壽山の修築擴張を行ひ、名を頤和園と改め夏季駐蹕の離宮に充てた、規模の壯大、建築の粹美は西山の景勝と相俟つて實に清雅なものである、この勝地を作り上げた清朝の權勢と人力の偉大さをしみんと味ふことが出来る。

權勢と人力を知る 滿壽山 瀟明

×昆明湖

大宮門から仁壽殿内に入ると檜や白松の巨樹をくゞり昆明湖畔に出る、古くから西湖と稱して有名である、澄みきつた湖の遠くに清晏舫だの十七孔橋だのが水に映つり、もうかすかに青

ばんだ柳糸が濫い早春の風にゆれてゐる、數十年の昔には支那の大官や美妓の顔がこの水に映りはゑたことであらう、と思ひながら水面を覗いてみるとそこには自分の顔が映つてゐた。

昆明湖映せばやばり 日本人 瀟明
うるはしき昆明湖の水の中貴人が
綾羅の衣うつしけむもの とも点

×長 廊

湖畔に副ふて仁壽殿から玉瀾堂、文昌閣、排雲門前を更に西へ清晏舫に至り、艇々二百七十七間の長い吹抜きの廊下がある、柱は綠色、天井は五色美しう支那式の塗料が施され廊下の兩側は楊、榆、白松などの間に點々と風雅な巨石が置かれ、庭も亦奇麗に掃かれてある、廊下の一端に立つて遠眺かすと丁度鐵道の軌道を見るやうに、廊下兩側の柱が長く遠く列びかすんでゐる。

ともゑさんはアラ、ギ派の歌をよくし、島木赤彦に私淑せる歌人であるだけに、この風光を賞するに一段の感興味が湧いてゐるやうである。

「その昔に皇帝盛んの頃のこゝは定めし壯麗なものであつたでせう」と語ればともゑさんは「所謂三千の美妓を随へてといふ所ですわ、ほんとに美しかつたでせう」と何やら手帳に書きはじめた。

げに、春宵風柔らかき頃、皇帝が美妓三千を随え、靜かにこの長廊に玉歩を運ばされる情景は全く壯麗美の極であつたことゝ想像される。

長廊に美妓 三千の衣の音 瀟明
春風吹けば綿繡の袖ひるがへし
渡りけむもの立ちてしのばゆ とも点

×佛 香 閣

萬壽山の中心には排雲門、その上に排雲殿、又その頂きに佛香閣がある佛香閣は萬佛閣とも言ひ、周圍に佛の顔を浮き出した瓦で張り廻され、その瓦の下は大きな花崗石の一枚石、中央が額になつてゐて鏡が嵌めてあつたそうた。

佛香閣佛の額に草臥れる 瀟明
仰ぎ見る萬佛閣は壁にして
金色の佛輝きぬませり とも点

×排 雲 閣

排雲殿は和園の正殿で兩宮駐 中朝賀を受けられた所で、佛香閣に次ぐ高樓である、長廊からこゝまで上るには九十九の階段があり、萬壽山の全景が一瞬のうちに收められる、清全盛の折、この高所に立つて、全支那を眺脱した皇帝の尊嚴と威令とを思ひ合せて自分も亦、急に偉らくなつた様な氣持になる。

皇帝の氣で排雲閣に立ち 瀟明
九十九の石の階のぼり降り
盛者必滅のこゝわり想ふ とも点

×銅 亭 子

排雲閣を少し西に下ると屋根も柱も障子も凡て銅で作られた銅亭子といふ小樓がある。
「伊藤傳右衛門の赤銅御殿はこれを眞似たんでせうか」と寺島さんはいふ

銅亭子金にあかした家が建ち 瀟明

×玉 欄 堂

こゝには皇帝時代使用された寶物や椅子、卓子、其の他貴重なる器具が陳列されてゐる。
「折角來たんですから、玉細工の衝立でもほしいもんですな」と濱崎君はいふ、慾な話だが寶物の立派さを卒直に表現してゐる。

×清 晏 舫

排雲門の西、昆明湖畔には有名な石舫がある、全部大理石造りで、船中には酒樓が設けてある、往時熱い夏の日や、月明の秋の夜にはこゝに皇帝の御宴が催され文武百官や美しい上臈達をあでやかさが偲ばれる。

瀟明

清晏舫榮華はいつか水の底 瀟明
春なれや小波よする石舫に
いにしゑ人の榮華をぞ思ふ とも点

×西 山

萬壽山の西に玉泉山……がある、共に西山風光の一つである
自動車が萬壽山を跡にして北平へ歸る途すがら、遙かに西山を
振り返ると峰の山々が南畫でも見るやうに黄昏を霞んで見ら
る。

西山に昔のまゝの陽が落ちる 瀟明
高樓にいこまばはるか西山に
春陽はかすむり愛しきけふかも とも点

×皇 城

清朝三百年の榮華を極めし皇城は流石に規模宏大、建築優美
四百餘州君臨する皇帝の尊嚴を表徴するに相應はしいものがあ
る。
宮殿を紫禁城といひ大廟、社稷壇、西苑、景山等の立派な建物
や禁苑が含まれてゐる。

清朝の豪華を偲ぶ紫禁城 瀟明
畫にも詩にもかくやは見まじ水めぐり
黄のいらか立つ紫禁城かも とも点

東華門で入場料を拂ひ保和殿、中和殿、太和殿、文華殿並に
武英殿と次から次ぎへと進む、昔時であつたら殿中はおろか門
内へも這入れなかつたのが、平民のしかも外國人たる吾々が女
連れで外套を冠り、ステツキをつきあちらこちらと見て歩ける
のは寔に幸福の時代に生れたものである

大和殿時代の幸ちを意識する 瀟月

×香妃の浴室

大和殿の後ろに英武殿がある、こゝは清朝が除夜の折外國使
臣を接見せし處だといふ、その一部浴殿がある、乾隆帝盛んの
頃臧歳を攻略し美妓香妃を連れ返つてこゝに住はせ、香妃の意
を迎へる爲贅を盡した浴室を作つたのだそうた

思出は遠く香妃の乳の風呂 瀟明
大和殿其他禁城の大部は恰かも寶物陳列場である、陶器、漆
器、玉器、細工、或は玉座たり椅子、卓子、外國獻上の時計
日本刀、外國の佩刀乃至は書畫名筆に至るまで、よくもこんな
に有つたものだと思ふ

寶物に疲れて大和殿を出る 瀟明
乾隆の文化に飽きる 英武殿 同
いにしゑ西太后も椅りにけむ
玉座まはゆき宮殿にして とも点
宮殿にウエルカム、ホルルの英字あり
丹の丸柱にかけるう立てば とも点

×中山公園

皇城内の西部は舊社稷壇で民國三年公園として開放したもの
である、池水、奇石或は竹林、檜林など一丸として中山公園と
稱してゐる、園内には桃、杏などちらほらと咲き、庭には幾十
株の牡丹が赤い芽を出してゐる

牡丹の芽赤きあはれ花咲かば
見んとし思ふ中山公園 とも点
竹林の尊く風に揺れてゐる 瀟明

×天 壇

皇帝毎年の冬至の日昊天上帝へ三跪九叩の禮を行はせられた
天壇は凡て大理石造りの三成壇でその最高壇の中央には太陽に
象つた丸い石がある、これを中心にして九曜の石があり更らに
九の倍数を用ひて天數に應じさせてある、周圍は檜の老木が
取圍み、その東には祈念殿がある

天壇で九曜の石の中に立ち 瀟明
老木に小島の啼けば天壇は
遺跡といふに何かさびしき とも点

檜古木こゝの歴史を取り圍み 瀟明
この外景山、北海公園の勝景や孔子廟、國子監などの遺蹟も
見たが、これらの遊記は後日に譲る。



ア・ラ・カルテ

馳いっ、いっ、いっ、

吉田 水車

妙なもので、こつちが誰かに逢ひたいと思つてゐると、先方でもそんな事を思つてゐるのか、方々言傳をして廻つてゐる。こつちもそんな工合にあちら、こちらに言傳してゐるのだから、お互ひに、言傳から言傳へ、尻を追ひ廻し合つてゐるやうなかたちである。その癖、別段堅い約束をしてゐるわけではなく、何處かで逢へるだらうなごと思ひ合つてゐるから愉快である。つまり兩方共獨り合點であるため、まるで見えない糸が何かに繰られるやうに、ほのかな期待で行つて見て、つい

今までゐましたがといふ様な惜しいところかのがしては、淡い哀愁を味つてかへつて来る。その留守へ、當の相手がたづねて来て、おんなじやうな事をして見たり、まるで馳こつてゐる。

たつた大阪の一區劃にあつてもそれだから世の中といふものは、狭いやふでも廣いなあと、今更ながら思はせられるのである。

子供に謝る

山本 喜山

四七日近いある晩になつてはじめて死んだ子の夢を見た。――

部屋一がい瓦斯燃えてゐて、火事の恐怖が身體中にみなぎつてゐた。横を見ると死んだ筈の子供が寝てゐる。あゝ、歸つて来たのか、よかつたよかつたと抱き上げてやらうとする、不意に寝返りを打つて、こそ〜と這ひ出した。おや生きてゐたんだなあと思つてあぶないあぶないと云ひながら押へに行かうとして、びよいと向ふを見ると、もう一つまるつきり同じのがこそ〜 這つてゐるはてなと思つてみると、こつちにもゐる。更に別の方でも又一つこそ〜 やり出した。それを押へてやつたらい、のだらうとろうろ〜しながら、みんなで五つも六つもこそ〜してゐる同じ赤ん坊を見まはしてゐたのだが、ふと氣がつくと、それがどれもこれもみんな目鼻のない、すんべらぼうで、これはと思つたある僕のまはりな、ぞろ〜こそ〜 這ひまはつて、しまひに部屋中一がいになつてしまつた。僕自身、何だか押しすくめられる様な恐怖の中で、聲も立たず、そのまゝ目がさめてしまつた。びつしより汗をかいてゐた。

この話を某人君にきかせたら、そうか、怖かつただらう、怖いね、いや全く怖い、と云つた。それにしても、こんな怖い夢で想ひ起

された子供は可哀相でもあり、僕自身、この子供に對して、何だか濟まぬ様な、かんにんしてくれよ、とでも云ひたい氣持ちがしてならない。

海老天

岡田 某人

「一寸一口……」といふので、通りすがりの、洗ひざらしの淺黄色の暖簾をくつたんだが、さて注文したものが運ばれて来ると、よいしょとバク付いた僕の横で、肝腎の發起者が、ふんといふ香りを立てた黄金色のな前にしたまゝ、一向喰べ様ともせず、まじまじと皿の中を眺めてばかりゐる。腹でも痛み出したんぢやないか、それとも何か埃でも入つてゐるのかと、そつと覗き込んでみたが、彼のも別に何の變つたこともない、ありふれた、無帽裸體の身長約一〇センチメートル位の海老が二尾、サルマタ姿で仲よく並んで五右衛門になつてゐるに過ぎない。一體何をそんなに思案してゐるんだらうと、もう一度、その物思ひに沈んでゐる様な顔を見なほそつとした途端、急に大きな、店中が一べんに

こつちをふり向いた程な聲で、アツハツハツ！と笑ふと、不意に僕の肩をポンとたゞいてあつけに取られた僕の顔の前で、もう一度そのアツハツハツを繰り返したのである。面喰つて、「一體どうしたんだい」と聞くと、「いやあ何でもないんだ、一寸おかしな事を考へてだもんだから」でも、喫驚するすぢやないか「すまん」が時に君は之を何と見る「指さしたのは皿の中の天ぶらである。「天ぶらさ」

「それだけかい」「それだけさ」だから君は駄目なんだよ。よく見給へ。二匹だろ。だから僕はこれが男と女ぢやないかと思つたんだ。そして若、これが男と女だつたら、ひよつとしてそのかみ、いや今朝方まで、鹽水の中で戀し合つてゐたかも知れない、いやあり得ることだよ。僕は多分そうだと思ふんだ。そうだと、確にそうなんだ。それが君、ちやんと金色の幕着をかけてもらつて、まあ、比翼塚さね、面白いぢやないか」といつたかと思ふと大きな口をあけて、むしやくとその幸福であるかも知れない一對を一口に、しかもサルマタごとゴリ付かせて、店の奥へ「君、いくら」と怒鳴つた。

町通りへ出たら、鈴蘭燈の上に月が出てゐ

て、まだ宵の口。「どうだ此度はやきとりでも喰べやうか」と彼が誘つたが、豚の腸壁について、こんなコワイ話が出るかも知れないと思ひた僕は、氣のせぬか、胃袋の中の想思の仲にあてられたのかも知れぬ、ムカ付き出したみぞおちの邊をおさへて、片手でバスの乗降口の棒をにぎつたのである。

どうし、八本の手が

動いて、又元へ戻つ

たかごいふ……お話

濱田久米雄

一つのボックスに——といつても、これは決してネオン震へる酒場のそれではなく、いともサツブリーケーな汽車の、であるが——ともかくそのボックスに、男ばかりが四人。一人は雑誌を、その隣の一人は新聞を讀んでゐる。向ひ側の二人は、これはやゝこしいことには一枚の新聞を左右から共同で、それと熱心にそうして無表情に讀んでゐる。

朝の通勤列車内は靜かである。この四人のみならず、見はるかす満室の各位においても

おの／＼サラリーマンとしての教養袋へ、社會の出来事を細大洩らさず、大はギリシヤの叛亂から、小は納屋半焼大事に到らなかつた事件までを詰め込むことに汲々としてゐたり、あるひは又、冥想する如く、ねむれる如く、默然たるもの……。パットの煙が時折上る。

これだけでは何でもない風景なのである。ところで、今の四人のすぐそばに、やゝ背の高い方に屬する何處かの女事務員らしいのが、四人の方へお尻を向けて立つたまゝ、これも婦人公論か何かの頁を繰つてゐる。席がないのである。にもかゝらず、誰一人としてこの婦人に對して謙讓の美德を發揮しようとする者がない。

でも、これだけでもまた何でもない風景に過ぎないのであるが。

突然、——といつてもこれは決して汽車が勝手にそうしたのではなく、何時でもこゝではそうなんだが、列車がカーブにかゝつた。そして、マクンゴクンとやつたと思ふと、初等物理學の理論ごほり、彼女は四人の紳士の新聞雜誌の叢の中へ仰向に倒れ込んだいや正確にいふと半分ほど倒れ込みかけたので

ある。途端に、男たちは持つてゐたものを放り出して、長いあるひは短い手を八本一セイに差し出した。そのために彼女は、あられもない姿の一步手前から、ゆつくりと、しかしながらどきまきと元の姿に立戻ることが出来たのである。そして、悲しいやうな恥しいやうな、情ないやうなその上腹が立つて仕方がないやうな、至極複雑な表情を、千代萩の政岡的努力を以て押しかくしながら、ついでに、この四人の親切な男の方々に對するお禮の言葉も忍耐してしまつて、そゝくさと別な車室へ行つてしまつたのである。

だがこれにしても、決して取り立てゝ申し上げる程のことではなく、實は何でもないことなのである。

その證據に、當の救援者達を第一として、車中の人たちは誰も彼も無言で、たちまち又元ざほりの表情姿態にかへつて、何事もなかつたかのやうに、さつき冥想の續きを探つたり、さて戀に狂つた自轉車屋のオカミさんがどうしたのかを知るために、新聞なり雑誌なりを取りあげたのである。そうしてみるとさつき動員された八本の手といふものも、決して決してみなさんがお考へになるやうに

人間性善説を裏書するものなんかでなく、八個の膝坊主を物理的衝撃から救はうとする本能的な、自己的なそれであつたに過ぎないことは、極めて明らかである。

だからこれは結局何でもないことであるのかも知れないのである。

たばこ人相學

辻いの助

自分の家はちつほげな煙草店であるが、種々な人間の階級色が煙草の買ひ振りに現れてゐて面白い。

「オイ、パット呉れ！」——敢然と猪突するところはプロレタリアの氣概を示してゐる「チェリーを下さい！」——インテリ層の全貌が出てゐる。

「御面倒ですが朝日を一つ願ひます！」——物の腰の柔い點、商家の主人公が。

「ちよいと、胡蝶ある！」——この發音は艶つばい職業層の婦人であることは確であらう。「——」——黙々と金を投出すのは、哲學的風貌の聖人？と思つていゝ。

滿洲旅の思出

森 半 疊

大正九年の秋から昭和五年の夏まで 滿十年、大連―鞍山―大連、本溪湖、四平街の順に在住した。私は屢々社務で出張し休みとパスとを利用してはよくあちこち旅をした、その旅で特に滿洲色の濃い思出を辿ります。

(一) 國際都市ハルビンには五回行った、最初は大正十年の十一月の末で着いた。當日は暖い日だった、翌日東省鐵路(今の北滿鐵路)の線路傳ひに貨物驛を觀て歩いた。午後から俄に降り出した雪が風を募り大吹雪となつて間もなくとても歩いてなご居れなく、近くのレストランに飛び込み馬車呼んで關係先の商店を訪れて用を果した。夜は同僚に誘はれて雪を犯して日本美人の料亭、遊廓町からロシア美人の居るキヤパレー、シネマ、それから例の〇踊泥坊市場などとのし歩いて夜が明けてからホテルに引揚げたのであつた。天地人の變化にその當時まだ血の氣の多かつた若い私のごきも驚かしたものだつた。その後に行つた一夜は何とかのブラクナ

スといふものを何ものも蔽はれざる 尺前に立されて見たことを思出すと人間の淺間しさにぞつとする。

(二) 先達來朝して京都の西本願寺の法要や東京築地西本願寺落慶式に參列した。蒙古の活佛阿旺圖巴丹を蒙古白音太來に訪れたのは大正十年の十月のある日であつた。白音太來は行政上奉天省の飛地となり通運として漢人町ではあつたが、蒙古人も未だ相當に住つて居た。その街外れに堂々たる邸を構え然も招せられた應接間は洋式な卓や椅子を置いて暖房もスチームであつた。釋迦無尼は美男におはすといふ程ではなかつたが、

快く阿旺圖巴丹師語らいて 茶をすするなり 苦難無からむ 白 崖

と歌つてるから温容だつたが朗明ではなかつたようだ。馳走になつた紅茶はバターが入れてあるので一杯を傾げつくせなかつた、紀念寫真まで撮つて引あげたが、後で聞けばたまには護衛兵つきで麻雀を打つ程の俗氣もあるとの事であつた。

活佛といへど後光の影もなし
活佛も矢張俗世の人であり

(三) 昭和三年五月の何日鄭家屯の奧マルチン廟に催された 西藏の活佛班禪喇嘛を迎

えての大法會に參列した、何千といふ喇嘛僧と善男善女が參集しての大賑だつた、日本人は吾々一行四人だけで僥遇をうけたが、何分宿る家がないので着いた夜は廟後の高原で天幕を張つて露營した、その一隅に日の丸の國旗を立て、大和心の氣をひきしめたのを忘れ得ない、狼の出る噂や萬一匪賊來襲如何なごど呑氣に語りもしたが、月光の冴えた一夜を驢馬の嘶く聲を夢現に聞きなが、しつゝ、毛布につままれて寝たのであつたが、穩かな時と信仰の力が、異境の野營を不安ならしめたことと思つてる。砂埃の立つ晴れた日で法會は首尾よく施行された。

砂埃浴びて活佛拜まされ
接待の茶に蒙古風砂を交ぜ
喇嘛教徒瑞典式の格で禮
向ふ疵あるのが喇嘛の信心家
日の丸を立てて安堵の野宿なり

(四) 昭和三年の二月白音太來から西約五里の莫林廟を見物した、東蒙古では最有名な喇嘛廟である。問答の禮や廟内の諸佛を觀せ

て貰つた。
喇嘛僧は數珠鉢卷で智恵統り
歡喜佛拜むのちとてれるなり
師の頭張るやうな喇嘛の問答なり

(五) その年の五月廿五日の夜東蒙洮南の宿で計らずも與謝野寛、晶子兩先生に遇つた兵匪におびやかされてる灰色の街での奇遇とか邂逅といふ言葉をしみく、味はされたその夜同行詩人佐藤某が、滿州里から流れて来たといふ夜の大和撫子を慰安？すべく訪れて屋外に俄にひびいた支那兵のいたづらな發砲に驚いて青ざめて逃げ返つたといふ珍話も笑へない思出である。

(六) その六月四日奉天ステーションホテルに泊つた曉例の滿鐵京奉兩線のクロスに於ける張作霖爆死事件があつた、巧に汽鐵車やそれに續く客車四輛が無事で、張氏の乗車を中心に、四輛と滿鐵の鐵橋と京奉線の線路とがびどくやつつけられてるのをまさぐと目撃してまた色々な流言を聞かされて更により以上の事件が、惹起する將來の機會が遠くはないのぢやあるまいかを傍に思はしめた。その日汽車不通のため撫順に與謝野先生一行と行を共にしたのであつた。

(六) その頃四洮線の太平川から西へ約十五里の瞻榆川に出かけての歸途、その間は全然樹木一本も無いともいふべき砂地つづきの中間地點で一行の乗合つた自動車が故障を生じた。三十分たつても一時間たつても修

理が成らず押せども引けども車は動かないだん／＼日永の頃とは雖夕闇はせまつて来る。歩かうと云出した者もあつたが蒙古の夜道を七里も八里も歩ける物でない、それが何時修理出来るか當のないのを待ちも出来ずと親しい間柄にも險惡な感情が湧いて来たが私は進で危地を歩くよりも、露營の氣で善處待機主義であつた。而して不安裡に待つこと約三時間一行の歸着を危ぶんだ太平川からの救援自動車に迎えられた時こそはほんとに地獄で佛といふ感じで、難有涙に咽だことであつた。よくもこの折ひよんな事件が惹起しなかつたものだと、今でもぞつとするがその待機の間、十數首の腰折を物してるから或はなるやうにしかならぬと支那式の没法子を極め込で居たのかも知れない。

人形のなげき

竹内機見女

川柳手びれり人形展の第一日目を見る、未だ充分に人形は出揃ふてゐなかつた。そして人形は出てゐても、それに句が入つて

居るのが少なくて、何か意味ありげな表情をした人形は、あたかも無聲映畫とおなじく、觀る者をしてもの足りなさを感じさせた。ところが人ばかりして居るので、何かと思つてのぞくと、人形師が毛筆をたづさへて、思ひ出し／＼して句を書き入れてゐるのである。そこが終ると又次といふ風に、職業柄とは云へ、よくも一々忘れずに居るものだと、私は感心したのである。併しさすがに句主の名は忘れてゐる様子であつた。

第四日目に再び見なほしてみると、そこかしこに、句が相違してゐる事に氣がついたのである。中に甚だしいのは、めづらしく折角、作句者の名を入れたのがあつても、作者をとりがへてゐるのを發見したのである。大衆は大體句の意味が、分りさへすればそれで満足するかも知れないが、川柳に多少の興味を抱く者や、その道にたづさへつて居る者は、一句中の一字にさへも心をとめて人形と共に觀賞するであらう、人形師たるものは、作家の句をもらつて、それによつて人形を作製し、一般に公開する場合に於ては、も少し一句一字に忠實でありたいものである。——一九三五・四・一二——

熱河日本語を習ふ

岩崎 柳路

▼熱河では總て素足を出すことを、甚だしき非禮として大變嫌ふ。このことだけでは大變にやかましい。僕がかつて夏季某ホテルに宿泊したとき、浴衣がけて素足のまゝ廊下を歩いてゐるのをとがめられて、初めて斯う云ふ習慣に氣付いたのであるが、特に女は素足を見慣れたを嫌ひ且つ非常におそれる。素足を見せぬことを第一の貞操と信じてゐるのみか、殆んど信仰的な誓約としてゐるので、自分の夫に對してすらこれを見せない。風呂に入るときでも足袋をぬがない。

▼風呂と云へば熱河の土着人はめつたに入浴しない。一年中に僅か二度か三度位しか這入らない。それは大抵正月と夏の娘々祭(内地の盆踊りのやうなもの)の際位だけである。しかもその二回には随分遠方から風呂に来るので、中には二里も三里も奥の方から出てくるものがある。

▼見渡す限り木が一本もない、みな禿山ばかりである。随つて夏など大雨のときは一時に大水が出る。川と云つても多くは平素水が流れてゐないのだから、大水が出るに臨時の川が出来てさつと流れてしまふ。雨も降つてゐぬのに「さあ大水が来る」と逃げ廻つてゐるので半信半疑である、瞬く間にさつと大水が襲つて来ると云つた始末。

▼昨年も大水が出た際、軍隊のトラックが數臺川の中に埋もれてしまひ、遂にその姿も見付からなかつたと云ふ嘘のやうな話。

▼私達の經營してゐる洋飲食喫茶店で、滿人

を備ひ白米を食へさしたところ、美味しいと云つていくらでも喰ふ。お菜も何もないが御飯ばかり無茶に食へる。それもその筈だらう。平素は雞の餌見たいなものを喰つてゐるのだから。

▼井戸水が一帶に悪い。奥地などに行つた兵隊なども往々この悪い水にあたつて、咽喉を痛めるとまるで豚の首見たいに腫れて、一生癒らないさうである。で、それを豫防する爲めに、われわれもしきりに海草類を食してゐる。

▼珍らしい貝類などの化石が澤山出る。これはいくらでも只で採取出来るから、送料さへ御負擔になればお届けします。

▼滿人が此頃しきりに日本語を習つてゐる。五十六十の老爺達迄若者に交つて、アイウェアと大きな口をあけて熱心に習つてゐるのを見るのが感激させられる。

▼教導班と云ふものがあつて、憲兵と警察を兼ねたやうな巡察員がある。うつかり滿人に對して支那人などと云へば、頭からお叱りを受ける。

▼學校がなく、滿人の住民は殆んど無學文盲電灯はついてゐるが、其他の文化は非常に遅れてゐる。

▼凌源には人口二萬人ほどあるが、日本人は僅か五百人位「われわれ」はその日本人をお客にしてゐる譯、鐵道あたりから来てゐられる方は仲々高給で、豪勢なもの。

▼匪賊はもう殆んど出ない。山奥に這入れば時々僅かに姿を表はす位なもの。

▼氣候は嚴寒には〇度以下三十度も下ることもあるが、夏は猛暑でも夜分裸では寝らぬ位。涼味を覺え、この點寧ろ内地より凌ぎ易い。

▼蝸と云ふ恐ろしい毒蟲が夏季家々の床下を這ひ廻るので物騒である。しかしこの蟲はこちらから危害を與へない限り、刺さるの蟲は萬一刺された場合はすぐ醫師の手當を受けないと「一命が危い。捕獲しやう。思へば澤山」と一晩のうち七、八匹もつかまへるこゝが出来た。

▼ラマ教の宗徒等には恐ろしい迷信があつてたと鐵砲の玉に當つても、必ず生き返ると信じてゐるのだから、日本の大和魂よりも強い。

▼匪賊を捕まへたこともある。先方の持つてゐたピストルは一發々々玉をつめる舊式で、不發だつたのが天祐、こちらは六連發のアーローニング、難なく捕へることが出来た。

▲ラマ寺にはエロ怪佛が澤山ある。人獸交の像を表はしたもので、これを信仰するのだから愈々怪奇を極める。エロ佛の出來た由來傳説があつて、何でも大昔の饑饉があつたとき神のお告げにより村の美處女を人身供養に上げるならば、饑饉から救はれると云ふので、その人柱を差出したところ、處女は勿論死んでしまつたけれども、幸ひ饑饉から救はれたと言ふので、之を佛像にしたのだと云ふ。▲私が以前鐵道敷設班の仕事に従事してゐた當時は、鐵道を敷き延ばしつゝ奥地を轉々し、恰度ジブシーのやうな生活を轉々し、約束されては大分と鐵道が普及し、尙將來も約束されてゐる。

(附記) ▲私が奉天在住當時泊つてゐた宿屋は現滿洲國皇帝陛下御亡命中の隠れ場所だつたことを最近知つた、目下皇帝陛下御來訪の確なもので當時を回想して、甚だ長く思ひ感慨無量なものである。

(一〇、四、七日柳路氏歡迎)

(旬會席上のスピーチ文責編輯局)

上野

- 江戸みつる、近藤勇、桑山清美三君は、今般大阪市東區粉川町一六で石鹼、化粧品製造及各種雜貨商三辰洋行を創業。
- 中島鐵洲君(鳥取支部)は鳥取商工展にテスケセット圖案其他五點入選された。
- 野村稻實君(高知)は神戸商業大學へ入學同寄宿舎へ。
- 橋本綠雨君(本社編輯局)は四月三日に生駒山上へ同十四日に吉野觀櫻へ
- 綿谷摩耶火氏(東京)夫人の尊父四月六日逝去謹んで哀悼の意を表します
- 前田義風子君(津幡)は四月七日金澤に於ける柳人街社主催の全國川柳大會へ出席
- 平田楯雨君(大阪)は四月十三日觀櫻會で河内天野山へ
- 御手植の松の綠や行在所
- 川上三太郎氏(本社客員)は四月十四日來阪、本社事務所へ來社、路郎主幹、雨送、

- 山雨樓、艸樂、汀柳と一夜懇談をされた。
- 窪田銀波樓氏(本社客員)は四月十四日高岡川柳會二十周年記念北陸川柳大會へ出席
- 京都の川柳街では四月十五日四條繩手仲源寺で滿洲國皇帝陛下奉迎川柳會を開催
- 本社竹原支部の觀櫻會は十月十四日に舉行
- 本社支部第十回行人會京都吟行は四月十六日に舉行
- 夕ざくら子供に先を急かされる (青木史呂)
- 夕ざくらみあげてかへる小商人 (平井與三郎)
- うつすりと影を落して夕ざくら (平井節子)
- 本社御池橋支部の左の三君は四月十五日六甲より有馬の湯へ (西いわを)
- 道足になりて有馬の宿近し (後藤青兒)
- 温泉の湯氣には酒の香も交り (村松夢裡)
- お、君もかと有馬の湯に出逢ひ (伯耆川柳同人 福岡希照君追善會は四月十六日伯耆手間大安寺に於て舉行)
- 高須囃三味君(東京)は四月十八日信州岡谷へ
- 卯月來て信濃路の山みな白し

- 小林平吉君(川柳研究社)は四月二十日佐世保、博多、門司方面へ旅行
 - 渡邊曉童君(今治支部)は日本動産保險會社へ入社。四月三十日吳市の近縣川柳大會へ出席
 - 手びねり川柳人形展は四月九日より十四日迄阪急百貨店にて若原清鼓氏の作品、同二十日戎橋森永にてその批評を乞ふ會を開催さる。
 - おもひで勉強會五十回記念、出版河柳雨吉句集の「柳風雨調」の記念句筵は五月五日東京吾妻橋俱樂部で開催。
 - 忠犬ハチ公追善川柳大會は五月八日夜東京澁谷第四區町會事務所で澁谷在住川柳家有志主催で開催
 - 川柳展覽會(博多)川柳拳骨吟社主催で五月下旬福岡デパート玉屋に於て開催の豫定
- 轉居
- 上野十七八君(八幡市平野町六丁目五三二)
 - 渡邊曉童君(今治市大坪通二四六)
 - 平井藤生(愛媛縣越智郡波止濱町うづしは方)
 - 吉田水車君(名古屋市中區南大津町一、共濟ビル山武商會名古屋出張所内)
 - 山根島人君(東京市麴町區丸の内三丁目二三菱廿一號館三信商會内)
 - 小阪隨帖(大阪市旭區生江町六一)○久米方
 - 福田山雨樓君(横濱市保土ヶ谷區保土ヶ谷町二一〇)
- 改題
- 前田朱郎君(は(双平))



岩崎柳路氏夫妻歡迎句會

四月七日夜 於 日本橋俱樂部

善隣の英主滿洲國皇帝陛下を我等喜び迎へ奉る日、本社同人岩崎柳路夫妻は、途々久方振りに郷國に見えられた。話題熱河の話は全く我々にとつて珍らしく興味深いものであつた。盛大裡に春の序曲の一夜を送つた。當夜突然會場の都合で變更したのは遺憾であつたことに吳々も來會者にお詫びします。

(九波記)

出席者 路郎主幹、美代路、角嵐、柳笑、立名、三碧、雨少、白柳子、いわを、卯三、苦捻、琴泉、青兒、正光、青踏、溪花坊、綠雨、美奈子、靜江、夢裡、青穂、史呂、機見女、翠夢、清美、みつる、世間音、萬よし、亂耽、山雨樓、禿山、千鳥、清彦、風水、墨洲、勇、東魚、ひろし、悟郎、かほる、瀧鼓、柳路、松代、雨迷、圭純、汀柳、九波、

席題「雪洞」 五選

雪洞は去年のまんま、よけてる
雪洞の消へた廣場は恐ろしい
雪洞に經營難の影もなし
雪洞はついたが、つぼみ未だかたし
雪洞の地口が解けず、まじ酒
雪洞が染めた頬とは思はれず
雪洞が揺れて三々伍々の宵
雪洞へ思ひきれない灯がともり
雪洞の灯をよけて高島田
雪洞を踏みつぶしたる立廻り
雪洞の揺れる真下の忍び泣き
さくら咲く國雪洞で酔ひしれる
雪洞にビールを呑むも久振り
袖屏風雪洞を持つ姿なり
雪洞を二階で見ると仲之町
誘惑をして雪洞の美しさ

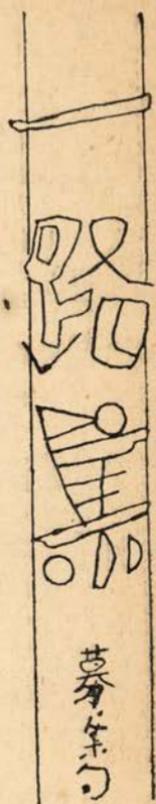
仁昭
美代路
芦穂
世間音
牛疊
清美
夢裡
機見女
ひろし
白柳子
青踏
溪花坊
綠雨
東魚
いわを

雪洞の中にやさしい京言葉
雪洞の中に揃ふた舞扇
卯月も未なるが雪洞の色
雪洞に誰の心を想ふ宵
雪洞の破れた頃に花が咲き
雪洞を揺り動かして舞ひ納め
雪洞の中に花片の黒くなり
雪洞の狭い廊下に裾を踏み
階級をはなれ雪洞面白し
雪洞へ此處ばかりが春のやう

席題「ハイキング」 萬よし選

口笛で鶯真似るハイキング
ハイキング蛇に出逢ふて道を更へ
ハイキング善い服で来て草疲れる
あつけなく頂上へ来たハイキング
圓滿を近所へ見せてハイキング
ハイキング郡境標で時計を見
ハイキング誰も唄はず疲れて來
朝刊を擴げて坐るハイキング
ハイキング東海道の松を抜け
ハイキングパ、強力の様に行き
ハイキング産業道路埃する
拗れちまふハイキング
ハイキング町の灯見えて眼になり
ハイキングその日歸りの風姿を
靴の泥そのまゝ戻るハイキング
ハイキング此處あたりも風の害
踏みしめる土も春なりハイキング
ハイキング三百哩行くとときめ

柳笑
同
角嵐
同
風水
同
禿山
同
艸樂
同
艸樂
同
卯三
世間音
史呂
美代路
柳笑
芦穂
艸樂
綠雨
雨少
苦捻
白柳子
正光
半疊
青穂
同
清彦
清美
いわを



手拭

橋本 緑 雨 選

アバートの窓に手拭あせた色
 除隊日手拭配ばる千鳥足
 手拭の色に團體續くなり
 生臭い手拭魚屋氣にかけず
 手拭の一と筋これで義理がたち
 子澤山手拭にもある生活相
 手拭を中に仁義の受渡し
 手拭を奉納に行病める人
 鉢巻をすれば手拭強うなり
 手拭へ満願と云ふ女文字
 貰ひ風呂濡手拭のつかみやう
 手拭をほしてふるや休みなり
 隣室にも客あるらし濡れタオル
 手拭の奉納の字が有難し
 行商に出る手拭を忘れまい
 手拭の結び矢張り日本人
 米若をまねる手拭肩に有り
 手拭に妻の匂ひも新家庭
 妾宅に有る手拭ひは艶めかし
 手拭を歌本に見せる高座かな

戸をあけたところへ手拭かけても
 もう捨てる氣のタオル靴をふき
 手拭をやれば酔ふたとは見えす
 手拭に職人氣質ねじて行き
 タオルでは鉢巻にふさはしかも
 手拭を品に見立てる漫談師
 廻り椅子もう手拭が待つてゐる
 手拭を首に結んで共稼ぎ
 開店へ手拭たんと染上り
 總踊り手拭一つ變つてゐる
 手拭が獨者らしい汚れよう
 手拭を腰にはさんだ律義者
 兎も角も急ぎはしいむしタオル
 花菱の手拭にある隠し藝
 濡れ手拭酒場から酔ふて出る
 手拭の匂ひも花街の儘貰ひ
 手拭を腰にはさんだ素直な子
 豆絞り極道らしい型で持ち
 豫科生は腰に手拭派手に提げ
 労働の肌へ手拭白すぎる

眺童 楚堂 錦城子 柳夢 木通 歌都路 青柿 桂林 水煙 馬占山 紫陽 葉光 緑水 いわを 苦蘆 非常兒 長樂

川柳家戸籍調 (續)

- (係) 緑 雨
- (1) 姓名 2) 雅號及別號 (3) 生年月日
 - (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以外の趣味 (10) 配偶者子供の有無 (11) 嫌ひなもの (12) 川柳に手を染めた年月

- (注) 速水眞珠洞
- (1) 速水晋次郎 2) 眞珠洞 (3) 明治廿年十一月三日 (4) 福岡市 (5) 同 (6) 洋品雜貨卸商 (7) 莊嚴端麗吉祥天女の御臍劍花坊馬馳けて地球の丸を抱かんとす五千
 - (8) 「大佛の蓮座のしたの丸い闇」太陽の留守明滅の灯が喘き (9) 書畫、芝居 (10) 妻に長女長男二人 (11) 嘘色 (12) 約二十年前から其前は短歌と俳句
- (注) 柳 瀬 子 行
- (1) 柳瀬勝次郎 (2) 子行九瓢、紅水、
 - (3) 明治二十八年六月十七日 (4) 大阪市西區新町通二丁目 (5) 大阪市北區北梅田町二五 (6) 住友伸銅管株式會社 (7) 雪の夜の針の運びに子が育ち (8) 自惚れるほどのもの出来申さず (9) 遠足、盆栽、食ふこと (10) 妻子あり (11) 水くさいこと、 (12) 大正七年九月
- (注) 小木曾飛春
- (1) 小木曾克郎 2) 飛春 (3) 明治四十三

手拭の片手が寒い貰ひ風呂
夕暮れを舞ふ手拭を一寸借り
手拭で埃はたいてめしにする

佳吟

手拭をだらり板場のいゝ話
蒸タオルしばし眼鏡をとつた
手拭が手摺りに竝ぶ朝の宿
手拭をにじるカツボレーと廻り
餘興場濡手拭の置どころ
手拭をかむる茶摘美しい女
隠し藝手拭だけの所作ですみ
貰風呂ふと手拭を置き忘れ

髪

成績の好いのが散髪しない癖
髪を結ふ横で朋輩足袋をはき
妹もう生活になれた髪でゐる
髪毛が多いと知つた丙午
髪省して父の白髪が目立つなり
洗ひ髪 夫も洗はうかと思ひ
洗ひ髪ふと廣告へ目を落し
黒襟は男まさりの束ね髪
癖のある髪へかみゆひま喋舌り寄喜固
白毛二三本話上手へ抜きそびれ
幸福な髪は握つて見せるなり
姉さんの髪が變つて別れる日
丸髻に結つてうつろな日が続き
氣に入らぬ髪開幕の時もすぎ
慰めて亂れた髪をといてやり

葉魚
世間音
墨川

世香
三碧
いの助
秃山
菊路
文月
久米雄
祥月

青兒
春秋
水客
久米雄
湖北
曉童
繁庫
世香
紫陽
綠生
凡愚
櫻崖
世間音

働いた丈手拭の色にみせ
手拭と浴衣が揃ふ段梯子
手拭を提げる湯治場悪くなし
借り手拭女の匂ひまだ残り

人

手拭にある體臭ふと氣付き
手拭が肩から落ちた濱の風
手拭に恥しい程瘦せて居り
手拭が僕の顔をば隠すなり

明石柳次選

こうしてはおれぬ束髪ときつる
ほめられてから髻に結ふ日
梳卷の女朝から風呂へ行き
髪結の話がはづむ一の替り
髪の出來娘婚期をすぎてる
梳髪でゐる猫板の物思ひ
束ね髪お百度石へ朝の霜
髪一つ亂さず就職の門
病院で髪のはつれも親しまれ

佳句

生活へ疲れ母の髪赤し
髪梳いて女は弱いものと知り
洗ひ髪暫く店を頼まれる
洗ひ髪わが娘ながらの髪艶
洗ひ髪ふつと淋しい年に觸れ

曉童
水客
梢雨
長樂

寛水
いわを
正柳
緑雨

車前草
菊路
葉魚
非常時
紅草
寒香
桂林
紅林
いわを
同

年十一月二十九日(4)岐阜縣土岐郡日吉村(5)岐阜縣土岐郡日吉村(6)雜貨商(7)子澤山僕の枕は何處へ(8)路郎(8)藥ならなんでも知つてやせて居る(9)旅行書畫(10)妻有(11)煙草(12)昭和五年九月

(15)

(1)辻伊之助(2)いの助、阿木底味、芋九羅男(3)大阪市(4)大阪市西區木田通一ノ五(5)明治卅三年二月(6)現在浪人(7)元旦だせめて眼鏡を拭きましよう(路郎)大佛の鎧衫を抜け(五葉(8)秋空(工場)の荒い息使ひ(9)淨瑠璃、文藝、映畫、繪畫(11)キザな人間、氣取り屋、虚勢を張りたがる人間(12)昭和五年末、

(13)

(1)酒井輝(2)照坊主新美、柄照(3)東江市(4)富山市清水町七六番地、(5)大正六年十月六日(6)理髮而して獨學生(7)君見たまへ渡菰草が伸びて居る(路郎師)君いま五六年の精進を要するものと自覺してゐますが現在自分で好きな句、

ゼネストの或る日にぎはう酒どころ送電を絶たれた家のエゴイスト

(9)俳句、讀書、散步(10)何れもなし、(11)義太夫、老婦人の化粧、キネマ、その眞髓を知らず川柳をうとんする人々、(12)昭和八年八月、九年七月末一時中止、十一月中旬るつろ吟社を起す、再び句作を始め今日に至る、因みに同吟社は初心者の集ひなればレベルの向上を待つて世に出づる積り、本旨は富山柳壇の振興と正しき發展を圖ること。

各地柳壇

れ創を句るあちのい



理整・樂紳・柳汀・耶路

- 投稿清規
- 一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
 - 二、文字正確明瞭に記載すること
 - 三、開催月日及場所記入のこと
 - 四、締切は毎月末日とす
 - 五、投稿先は本社事務所

川柳雜誌社 畔柳社彌生例會
大鐵局支部

三月八日

於大鐵局俱樂部

兼題 道樂

山雨樓選

新開地 道樂者の帯がとけ 木履
 流連けが歸ればこげた目刺が出 亂府
 道樂の鼻緒がきれて流連ける 水客
 色 街の朝道樂の白い足 天秋
 (佳)あかされの手で道樂へ着せり
 (同)道樂へ上手な嘘を云ふて出る 天風
 (同)道樂もあつて帳場に堅くある 明坊
 (人)道樂のなかつたな母不憫がり 水客
 (地)一藝を持って、薄い蒲團で寝 某府
 (天)夜遊びの家では母の糸車 亂府
 (軸)道樂の小鳥の餌をうるさがり 山雨樓
 兼題 乳母車 山雨樓選
 境内の鳩と馴染の乳母車 亂府
 乳母車れんげの風のやはらかさ 水客

父さんの歸り道知る乳母車 吞行
 乳母車子守の戀は知らぬなり 同風
 子を持たぬ淋しさで見る乳母車 某人
 一銭の行衛が知れぬ乳母車 木履
 (人)乳母車待ちくたびれた洗張り 久米雄
 (地)春風の底で乳母車の寢息 秋生
 (天)乳母車押す日曜へ梅の花 山雨樓
 (軸)バラソルが一つ浮いて乳母車 山雨樓選
 兼題 氣焔 山雨樓選
 怪氣焔はいてうれしい二階借 ひさし
 口角に泡の氣焔がまだ若し 明坊
 スキーすぐにボートをやって見せ 笙天
 怪氣焔みながまじめたよりの見 九天
 (佳)氣焔ふと月の青さを淋しく見 明坊
 (同)怪氣焔女給コンパクトもぞき 久米雄
 (同)女房と向へば氣焔のないの音 木履
 (人)獵自慢櫓くへ添へ寝よとせず 某人
 (地)頬骨の高い女給の怪氣焔 天秋

(天)見當の違ふ氣焔へ猪口をさし 水客
 (軸)氣焔など飛ばし卒業明日になし 山雨樓
 席題 つばめ號 被講 五選
 鮮人が立たうともせぬ燕號 天秋
 つばめ號雪を吹きあげ 明坊
 踏切を燕號無事に通るなり 九天
 驛長が出て待つてゐるつばめ號 山雨樓
 つばめ號その夜のたの酒に酔ひ 天風
 大阪の眞書がしるつばめ號 水客
 夕めしは南地にしようつばめ號 久米雄
 蝶々が吹き飛ばさされた燕號 水客
 つばめ號見送り午後の事務となり 天秋
 席題 安宿 清記 五選
 安宿へ巡查の眼が光るなり 天秋
 安宿のふとんに微をふと見つけ 天風
 安宿に虚無僧一人光つて 木履
 足洗ふ宿の裏の裏手は畑續き 水客
 長雨の木賃で掃き起される 某人

安宿の窓の眞下の寒椿
安宿の女中びんつけ句はせる
山兩樓

席廬 就 職 明
就職が出来ず端唄が上手なり
坊選

就職日母ネグタイの柄を聞き
久米府

就職へごも嬉しい音ばかり
木履

(佳)新採用給仕の瞳のあざけなき
天秋

(同)就職に近眼鏡がゆるいなり
九天

(人)就職は隣の椅子の欠伸見る
山雨樓

(地)就職の知らせ故郷は梅盛り
水客

(天)小遣を母にもらつて初入社
九天

(軸)確信もなく履歴書を預けられ
明坊

席廬 無一文 天
無一文汽車の線路は眞直だ
八選

無一文セルが一枚あるのなり
水客

残つた二錢で字を買はされる
九天

無一文大飯いやが上に晴れ
同人

無一文法被の裾で汗を拭き
某人

(人)無一文夕刊のまだ来ておらず
山雨樓

(地)無一文ほらも吹けない寒さ
九天

(天)この脊を美人が多い無一文
楚堂

(軸)無一文知つてか友の置き煙草
山雨樓

席廬 女事務 某
女事務嫁入り支度する積り
八

女事務退ける句の五分前
人選

丸髷の夢で目覚めた女事務
室人

香典を張つたと思ふ女事務
木履

して紐で襟をかけた女事務
久米雄

女事務案内小遣持つており
九天

女事務花の師匠へ廻るなり
山雨樓

(佳)舊友の兒を抱く女事務の顔
木履

天秋

(同)女書記がばりお茶を吸んで呉
楚堂

(人)日曜は姉の姿の女事務
吞行

(地)たゞずんだ春母いとりの女事務
水客

(天)女事務男の馬鹿を背に聞き
山雨樓

(軸)我儘な子となる夜の女事務
某人

出雲 合 同 句 會
伯書

二月十七日 於出雲清水寺境内温泉館
三鴨美笑報

出雲と伯書の合同句會を 清水寺に於て開く
調選

策題 愁
愁目からまたこつそりと母の慈悲
知遊

病み上り愁を離れたようにぬる
虹子

平常の愁はそくかた義損金
涼治

無の無い人にお金がありすぎ
奈翁詠

愁が出て仕事皆んなまとまらず
美笑

愁張りの利用されるとは知らず
芳葉

(人)愁張つたみかん梯子へ来て
涼治

(地)愁心もなく牛玉の手があれ
奈翁詠

(天)愁からの貰手の脊によく寝り
涼治

策題 春
團體の數といつしよに春が来
笑選

支店長春の居眼りしそうなり
奈翁詠

船大工春を忙がしそうな音
虹子

(佳)若草を投手靜かにふんで立ち
同

(同)地下足袋の跡乾ききる春の道
涼治

(同)春風に糸ありたけの風をあけ
芳葉

(軸)年頃を働らき抜いて春うれし
美笑

策題 正 直
正直に言へば母親泣くばかり
奈翁詠選

後から手をたゞかれる落し物
涼治

啞調

虹子

正直な時間を馬鹿にされて待ち
虹子

正直に妻に話してたのしかり
美笑

正直な話したと一座向きなほり
知遊

子を連れて體裁の好い嘘がばれ
宙二

(佳)許婚正直過ぎてもの足らず
虹子

(五)正直は一年生の朗らかさ
啞調

(人)保険屋へ正直に言ふ生活向き
涼治

(地)正直な子供に親の名前が出
美笑

(天)正直であつて出世に遠いなり
宙二

席廬 情
人情をたて、世間をせまく生き
治選

情のある女教師と知る雪の朝
奈翁詠

樟腦を同情させて賣て行き
美笑

表面は情を知らぬ伯父となり
虹子

(佳)板圖ひ情を知らぬように立ち
宙二

(同)情などないとあかりにそぐ父
芳葉

席廬 滿 洲
弟にゆづり滿洲で働らく氣
子選

骨になる氣で滿洲へ渡るなり
美笑

滿洲へ立つ兵隊は皆笑ひ
奈翁詠

(佳)滿洲へおとしてやつて暮に
啞調

(同)滿洲へついで行く來る腕の節
涼治

(同)滿洲へ行く滿洲と思ふ母
涼治

(秀)滿洲へ信用のない顔を棄て
宙二

席廬 鐘
この寺の歴史もきいた鐘の音
二選

今の身に鐘は悲しいものとされ
虹子

今更に鐘の音寂し旅の空
啞調

鐘の音は男ばかりの身からみ
芳葉

鐘樓へある日博士がおとづれる
涼治

(佳)石段を下り切つた處へ鐘が
奈翁詠
美笑

席題 帽子 子 義風子選
 (人)今買った帽子店から冠り出る 勝治
 (地)訓練帽型の如くに並びたり 和夫
 (天)新品を冠つて末だか氣にかり 勝治
 (軸)帽子にも個性が伸びた冠り癖

川柳雑誌
 玉造支部 更生句會 於岸南柳居
 二月十一日 清水友帆 報

席題 「炊煙」 路耶先生選
 おかゆたく煙眞直ぐのぼるなり 満潮
 天井の揚げも二三代は焚き 友帆
 子を泣かせながらカントキくす 満潮
 (人)煙突は一人暮しの煙を立て 白柳子
 (地)炊煙はのかに高臺を包む 新水
 (天)臺所の煙へ母の老ひ給ふ 路耶
 (軸)立竝ごころかネオン街になり 同

席題 「頸」 新水選
 頸撫て主事も處世の一つなり 満潮
 又頸へきてサレットが引かかり 友帆
 ネクタイを直して貰ふ頸を出し 紳樂
 席題 「名刺」 紳樂選

母親の名刺抽斗から見つけ 白柳子
 失業へ名刺きれいに刷れてくる 満潮
 丁寧の名刺を出せば見くびられ 白柳子
 花名刺こんな相手がほしいなり 満潮
 軸金にならぬ肩書が名刺にあらぶ 紳樂
 席題 前進 白柳子選
 項上は目前に迫りはかざらず 紳樂
 前進へ特高課の眼の動き 満潮
 前進へ子のある事を忘れかけ 同

前進へ時間が足らぬ事になり 新水
 前進をする皇軍に拍手する 玉格子
 (軸)賣上の前進だ晩酌に酔ふ 白柳子
 節三郎氏 結婚祝賀句會 (大阪)

三月二十二日 川柳雜誌社俱樂部
 席題 密月 正光選

木も草も風もたのしいホネムーン 一更
 失戀を秘めて見送るホネムーン 六郎
 雨の日の雨で楽しいホネムーン 浮鬼
 ホネムーン親へ手紙を出し忘れ 史呂
 釘ひと打つたら若夫婦の智恵が 豆樂
 密月へさつくらばんの友か来る 夕鐘
 ホネムーン窓に琥珀の朝がきた 綴紅
 妻の名も呼べて密月なかげすぎ 文朗
 ホネムーン夜着をまじたまむなり 静太
 (軸)ホネムーン貴夫と呼べ銀経ち 正光

兼題 松 與三郎選
 濱の松何か未練のある姿 山雨樓
 松一つ大きく舞臺能がゝり 禿山
 松の影しめん春をひとりある 柳次
 名園の松は女の化粧に似 史呂
 まごこと松むしとられむしと 節子
 あの松で休む草鞋の細となり 曉童
 (軸)庭の松の讃めて仲人席につき 與三郎

兼題 鯛 山雨樓選
 入替へ少き鯛を焼く母よ 静太
 むつとめを果たして鯛の潮汁 機見女
 到来の鯛臺所さわかして 里十九
 鯛の向ふに藝者かしこまり 柳次
 嬉しさを包みきれない鯛の色 史呂

まごころの小さき鯛がそりかへり 綴紅
 卒業へ母はだまつて鯛をやく 六郎
 (佳)真正面から見る鯛の顔恐ろし 正光
 (同)鯛の名がまだのみこころ初誕生 春光
 (人)針子薄に鯛を二尾と書き 綴紅
 (地)仲直りみんで覗む鯛を買ひ 正光
 (天)魚屋の開業鯛の繪が真赤 史呂

席題 寶 互選
 寶物さわればこぼれるやうに出し 與三郎
 國寶と聞いても一度振り返り 柳次
 寶物殿窓からにぶい陽があたり 夕鐘
 寶石屋何日の間にやら代替り 正光
 かが臭い藏の中なる寶物 山雨樓
 しょうむない物が察實で邪冤に 節子
 冷え性の女へつづく寶物 柳次
 寶物へ車夫の英語のたまりなし 水

祝 吟
 ふたありにはるさめちかきおまな 民郎
 奥様も飯のこげたを句ににまどめ 案山子
 句から句へ續く理想のまるい夢 山門
 川柳雑誌社 「彌生句會」 池田橋支部

日本樂器會社にて 西いわを報
 席題 「間食」 互選
 間食へ氣嫌の悪いせきばらい 夢裡
 間食は新聞置いて笑ふなり 青兒
 間食のところへ幼稚園から戻り 豆秋
 間食の後くちびるを上に向け かほる

席題 「上着」 夢裡選
 さあ来いと上着を脱ぎつ将棋盤 圭子
 つと上着脱ぎ捨て、子を抱き いわ

質受けて上着の柄をなつかしき
(佳) 酔ふてきた上着は好きな妓
席題 「春 雨」 豆 秋 秋

春雨にくるわの街の灯がうるみ
春雨に舞妓も 雨衣着て通る
春雨に三味音あり立止まり
春雨にコースを替へた二月堂
(佳) 春雨へいつか頼んだ軸が出来
(同) 春雨に上戸が目玉据へるなり
(同) 春雨へ刀を抜いたまねをする

方角を屋根に尋ねる冬の火事
聯想は赤屋根だのと若夫婦
高架線アルとプロとの屋根の上
二階借り屋根の上からウイソクレ
いら立てば屋根の黒さも悪くなり
屋根越しに見る御邸の廣い事
ヒヨロ〜と屋根の草も春が来た

豆 秋 秋
主 子
品 子
夢 裡
同
青 兒
かほる

品 子
暗 哉
一 羊
み つ を
青 兒
夢 裡
豆 秋

兼題 「屋 根」 かほる 選

兼題 象 喜 山 選

洋装へ象は細目で鼻を振り
象の鼻振れば雪崩れる人だから
パン屋を象こくめに拾ふなり
つなぐれた象は足から見上げられ
(人) 春の子も象の小い眼に氣づき
(地) つながれて象牙を邪魔に住ま
(天) サイカスの外の象を見て歸り
(軸) エレファンと呼ぶグラスの人氣者

兼題 象 喜 山 選

新しい噂が露次へ持ち込まれ
戻された噂椿は重く落ち
(佳) 聞き合はせのつぶきを開き
(同) 大整理どうやら春を越えたい
(軸) 高島田噂の中を赤くぬけ

研究が眉間の皺を深くさせ
研究室からモルモットのびで出る
(佳) 資財まで燃やした癌の治療法
(同) 研究へ花見の氣息云ふてくる
(軸) 研究は自分の薬で死んぢまひ

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

度強い近視が離さぬ英語 辭書
ハイヒール赤い表紙の辭書を持ち
字引たい机の上の幅をとりに
(佳) 學歷を無視して字引めくる
(同) 辭書おけい徹夜の窓上月青し
(軸) 理屈おけい男字引を出して来る

卒業の青嵐がひとつ出来た木
人生は四十からなりあくびする
(佳) 子の前途しみく思ふ夜の吐
(同) 捨てた兒を木蔭で拜む親心
(軸) 高らかに初聲あげて前途あり

「倦怠期」朝鮮米に變へて見よ
腰辨當朝鮮米の味を賞め
朝鮮米食へて百姓の倅でず
(佳) あじけなき晩朝鮮米の石に
(軸) 珍客へ朝鮮米の湯氣がたち

小集句會

川柳雜誌社 竹原支部
二月二十四日 於 承春居 承春報
席題 散 歩 五 選

銀ブラの約束時計遅々として
面白くおかしき散歩ふざけて
草薺のいされ散步の下駄が鳴り

消ゆよしもなき獄壁の落書か
落書へ何時か彼女の名がまじり
落書へ子供は智慧のありつたけ

落書の一ツが面白く
承春 承春 承春
席題 落 書 五 選

求婚の二人を婿に貫ひたし
サイレンへ諦めきれぬ二對一
熱戦の跡物語る二對一

三月二日 於 登仙居 小集句會
席題 美 五 選

爪にまで美粧をこらす暇があり
芳泉 芳泉 芳泉

美しく香つて見ても心死し
自惚の顔が出て来る美容院
席題 車 互 選

町へ行く車の音に夜が明ける
車寄せ其れから續く幕の目
轉段へブルゆつくりと降りて来る
とぼく〜と歩む車夫へ警笛
春帆 春帆 春帆

B K 川柳會

塚越正光氏の大阪在住を迎へて久しぶりの句會を三月七日夜新町水仙居に催す正光
三巴、波朗、也朗と庵主水仙、
波 朗報

題「新町情緒」(舊交) 互選

盃の癖も話題の何年目
一現は神山あさの家を訊き
新町のさくらが咲いて妻を連れ
出張の思はぬ友にめぐり逢ひ
こゝからを新町にした黒あんご
吉田屋の晝はま〜視かれる
書割のやうに九軒へ灯がともり
歸省した晩悪女が来て呉れる
同 正光
川柳雜誌
今治支部
會 曾我部啓明報
(今治)

三月拾四日 於伊豫相互貯蓄銀行支店

兼題 夕暖 簾 曉 童選
質といふ暖簾の庭が暗いなり
いとほんの吐息を獨りしるのれん
(人)繩のれん頭ではいるふと手
(地)繩のれん出た地下足袋に明日
(天)繩のれんすつと道入れば壁が
宵明 宵明 宵明
紫陽 紫陽 紫陽

(軸)暖簾からお染のやうな戀する
兼題 夕紅 茶 宵
來客に何はなくともまず紅茶
身の上を語る女給へ紅茶冷へ
應接間紅茶の湯氣へ待たされる
ほ、えぐが紅茶湯氣の中にゆれ
(人)雑踏の氣疲を知る紅茶の香
(地)紅茶なといひて結婚三ヶ月
(天)紅茶まだ二人は戀にふれて
兼題 夕人 格 心

人格者公園の朝二度通り
肥桶をかついで村の人格者
女房に去られた露路の人格者
人格者らしく思はれ思はせて
(軸)いゝ髻を持つて人格者と見え
兼題 夕女 將 一

料理屋の女將は出来だけ太り
口ずさむ女將の唄は過去にふれ
羽織着て女將お世辭を云ひに来る
評判の女將亭主の名が知れず
餅花の大將小の女將がある
女將また次の手段を考へる
電話口女將の智恵が行つまり
(佳)學歴のない女將の自慢なり
(同)電話口女將の聲で来てめへん
(同)そこまでを送る女將に肚が
(同)妓をみんな出と女將の長煙管
兼題 夕實 印 曉

借金をする實印が立派すぎ
實印はラッキョの皮ぼごつ、んぞ
實印のありかを知つてる不幸者
一風 一風 一風
童選 童選 童選

實印がきれい出来て金を借り
小切手へ父は實印かるく押し
(佳)實印を押しで冷たいお茶を
(軸)實印へ女房出すた口をき
兼題 夕驛 長 宵
ゆつくりと煙管をしまふ老驛長
驛長の帽子がしやくな乗りおくれ
(佳)驛長へ次の驛から来る辨當
(同)心中の話驛長目をつむり
(軸)驛長の見守る行手に宵が浮く
兼題 夕かくし藝 夕 互選

かくし藝今からといふ顔になり
かくし藝藝者三味線おいて呑み
かくし藝隅におけぬと呑まされる
かくし藝女將もみない席につき
かくし藝社長へ願が廻つて來
女房がこわい男のかくし藝
もう一度紺屋高尾を所望され
兼題 (お守) 於カナメ
三月十日 會
光笑會支部 例

お守が一つしよあれさあか妹か
お守りの腕に麝香の匂ひする
お守を腰に遠乗りを許される
お守を巡查も一度目を通し
ばくちうちお守りさんを受けに
お守をすきな女にあげて見せ
兼題 (板の間) 互選

板の間水銀めらり〜逃げ
金借りに來た板の間を泣りかけ
一風 一風 一風
童選 童選 童選

宵明 宵明 宵明
繁木 繁木 繁木
曉童 曉童 曉童
心府 心府 心府
府選 府選 府選

宵明 宵明 宵明
繁木 繁木 繁木
曉童 曉童 曉童
心府 心府 心府
府選 府選 府選

宵明 宵明 宵明
繁木 繁木 繁木
曉童 曉童 曉童
心府 心府 心府
府選 府選 府選

宵明 宵明 宵明
繁木 繁木 繁木
曉童 曉童 曉童
心府 心府 心府
府選 府選 府選

階級と別に給仕は腹を立て入學に階級のある一年生階級をかたくし切れない無禮講飯臺にふと階級を意識する(佳)階級は黒を白にしてしまひ(同)階級の冷たき飯に箸を入れ

兼題 折 袍 玲

折袍尊く持つて祕書であり折袍かくもふくれて人の金折 袍戀當半分巾を取り折 袍戀を忘れた男なり折袍さて生活のなやみなり(佳)折袍出張旅費はみんな呑み(同)折 袍 神 經 衰弱に候(同)晝夜ケンコー疲れて居る折袍(同)折袍やおら開けばアカメロン

席題 不自然 莞

不自然に生甲斐のある第二號不自然な嘘も母親納得し金策は不自然な挨拶電話でし失戀は不自然と云ふ呑みつ振り不自然な微笑 淨草嫁業なり(佳)不自然なをんなの媚がこもる(同)不自然に子が死んだ子が死(同)不自然に酒が打ち明けた戀

席題 最 初 祥

先づ最初落ちる覺悟で試験受け嫁貰ふ最初 夜を考へる最初とは違つた意見で飲み歩きコップ酒最初の手付と思はれず藝者まだ最初の男あききらめず

錦葉 一湖 笑鬼 玲兒 笑鬼 柳人 兒選 山川兒 都之介 錦葉 錦葉 祥月 卷二 都之介 一湖 都之介 路選 糸葉 笑鬼 山川兒 卷二 都之介 柳人 同 卷二 月選 山川兒 錦葉 柳人 錦葉

ジャズの音も最初にして若き夢最初からやり直しさと懐手(佳)初會惚がく、僕はニホリズム(同)追ふ影は最初に見ぬ妓の笑ほ(同)はぢめての接吻でした朧月

席題 瓦斯燈 天痴人選

酔うて居て瓦斯燈の色心地よし人通り絶切れて瓦斯燈明るすぎ瓦斯燈もコキソチツクに賣笑婦死は易し涙のリズムとアীগド燈

席題 筋 道 錦葉選

筋道の通りぬ戀をしてしまひ筋道の違ふ話にひまが入り生活に筋道がたち髭をたて心中の筋道母は泣いて讀み

席題 銅 像 糸葉選

銅像の何百年の錆を見る銅像をぐるり圍んで櫻咲き銅像の肩のあたりに鳩の糞銅像を見上げて志があり銅像に背を向けてる待ち呆け冬來れば銅像忘れられてゐる

席題 春 卷二選

病床へ春の陽ざしを入れてやる人みんな綺麗に見えて春の來る病院の窓へも櫻散つてくれ春や春一升瓶がほしくなり木缺の音から春が忍びくさり禁酒した自分に春が恐ろしい(佳)風既に春になつたる療養所(同)忍びよる春を恐もトラヒスト

芳井 天痴人 都之介 柳人 卷二 卷二 糸葉 都之介 葉選 柳人 祥月 天痴人 山川兒 錦葉 曠安 卷二 同 同 同 二選 錦葉 柳人 天痴人 祥月 莞路 同 莞路

夜櫻へ嬉しい組が三つ四つ櫻狩り空き瓶蹴つて立ち上りいひなづけ櫻の花を折らせられ櫻が咲いた戀も咲いた春失戀を櫻の下にすてゝ來るさくら音頭に手足がちが酒の酔ひさくら咲く松江城山晴れてゐる(佳)櫻ととりぼつちに眺められ(同)櫻がレンベンにうそぶく咲く

川柳雜誌社 句會 (菘ヶ池 菘ヶ池支部)

三月十日 於新館休養室 櫻紅報 兼題 川 與三郎選

飽屋が春の風に押されてる川 煩悶をすてた小川はあなかりき 一葉の流るゝまゝのわれとなり 巡航船川一べいの波をたて 申 譯御座無候川に淨き 片戀のバットを川へすてるなり

兼題 街 史 呂選

國を出て街へ住めたも紙芝居春の街電車の中の人も春ピストルの音がしそうなピル街廓街を通る舞子の鈴が鳴るやわらかきな女のひざが街を行く口笛を吹く少年に街の灯やバスガール歪んだ街に疲れゐる非常時の街に子供の三勇士

街へゆく娘が春を匂はせる
 (人)闇の底、街の仁義の消ゆるなり
 (地)街たゞ騒音の中に春めく
 (天)失業の身にしむ街の土は冷え
 (軸)春だと云ふに通行止の多い街

席題 窓 公

結婚に歸る汽船の窓なりし
 子澤山窓の少ない家に住み
 戀があるのか窓に男の凭たれて
 (佳)退院の病友を窓から送るなり
 (佳)居るんだ窓の氣配に呼びな
 (佳)窓を開けばスッメ鳴いてゐた

席題 晝 浮

帯解けばしつゝ晝の雨が降る
 牧場の牛は晝寝をするばかり
 晝を行く女給の瞳濁りある
 (佳)父黙りこくつて晝をしぐる
 (佳)眞晝ばかんとあれば解^せ憂鬱
 (人)晝眞晝、女嬢聲あけてゆき
 (地)叱られてる晝白々し窓をあけ
 (天)惚れら^せ男が晝のカフエ^を

席題 雲 緋

道頓堀雲を見てゐる所でなし
 黒い雪仰あて仕事さがしに出
 雲行がごうであらうと飲む氣なり
 雲低き生活線の街に出る
 白雲へ野心小さくちさくなり
 片戀へ小さな雲の流れたり
 (佳)卒業の證書を持つた今日の雲
 (佳)ホアア白い雲に伸び春を呼ぶ
 (佳)雲の峰きれ目高のぼつて来

六期 静太 晴夫 まさる

平選 奥三郎 浮鬼

葉津子 源太 錦雀 晴夫

柳太郎 史呂 晴夫 史呂 源太 晴夫

紅選 奥三郎 柳太郎 浮鬼 公平 晴夫 静太 葉津子 流之介 静太

席題 弟 静 太選
 弟に家をまかせて呑氣なり
 新妻の弟出過ぎた口を利き
 夢に來し弟いと小さかる
 二年ぶり會つて弟毛をのべり
 (佳)丸刈の兄へ弟毛をのべり
 (佳)弟の女を探る氣で出掛け
 (軸)いゝ天氣兄弟ともに戀がなし

三人寄りて (大阪)

山火事 水谷鮎美報 觀月
 山火事へ汽車まつすぐに走るなり
 山火事に踏切番はごなりつけ
 山火事は盛んに燃えて日が暮れて
 物干は強い風なり山の火事
 百姓のくわえ煙管へ山の火事
 山火事の向ふの村に虹が出て
 山火事をかめらにとつた登山服
 山火事に三日月さまぐるなるなり
 山火事にお寺の鐘が響くなり

水車鮎美の車中吟

三月十三日(西宮から大阪まで) 鮎美報

春近き家根のびにける高架線
 春めいた空氣のほふ金屏風
 芽のもの春へ息する一と所
 名優のかなしきうわさ春近き
 春近きお隅櫓の壁白し
 春近し麻雀の窓あけられる
 春近し東海林太郎は唄ふなり
 春ちかく小猫の鈴をかえてやる

おでん屋の湯氣がゆつくり春ちし 同

川柳雜誌社 大地吟社會 (島根) 同
 四月一日夜 於金岡草路居 尼縁之助選

兼題 精力 草路
 精力がほつきり折れた病氣です
 精力の脂肪じみてる口紅も
 四十の精力戀をひるいに出かけ

同 チューリップ 金岡草路
 チューリップは愛戀のプレセント
 チューリップ彼女の戀をきまじ
 欠伸一つチューリップに水をやり
 うらゝかに陽を集めたチューリップ
 (人)チューリップマダムの息惚窓
 (地)未亡人若くチューリップの青が好
 (天)頼りな男チューリップなご作

席題 爛漫 大國雨舟選
 花 爛漫機械體操に散り さわた
 (佳)らんまんと咲く梅花の下懐手 凡 愚
 (同)春はよしらんまんとして散る姿 木樂子
 同 困る 尾添好郎選

いたづらで困りますよと口の先 雨舟
 困ることも言へず鋭い凝視よ 草路
 困惑の果も女は媚びるもの 木樂子
 (佳)女十八母を困らす術を知り 縁之助
 同 神 秘 森田木樂子選
 神祕の底の母黒子見守りぬ 好 郎
 もゝいるの神祕ちぶさはもありあ 縁之助
 君と僕神祕な糸にあやつられ 雨舟
 (佳)山の神祕に女を忌み 火川
 (同)朧枕夜の神祕にふれてゐる 縁之助

同夜食

山内凡愚選

今晚の夜食はうざんと決めて出る

夜食迄もう一息のメンを執り

香煙しめやかに夜食の灯がにぶい

こみ入った話夜食に恐れ入り

川柳雑詠社 句會 (大阪)

行人會支部

二月二十七日

於平井春光居

兼節 草 節 子選

若草の一つ一つに春の息

雜草をわけば舞劍が出たこわさ

草餅へ故郷遠く味はへり

思ひ出は釣鐘草の話きく

草捨て、捨て、流れを見つめてる

瞳の青い少女に草が青みたり

ホリタブル草の青さへソツと置き

投げ出した足を凝視めて草の上

捨てられた鉢に若草萌えかゝり

兼節 時 計 春 光 選

銀時計交の昔の物語り

寝るにつけ起きるにつけて時計の音

(佳)腕時計幹事も一度立ち上り

(同)春の夜をホカンと居時時計鳴

(同)おくれの時計と氣付き慌て出

(同)二ヶ月の病友の寢臥に時計鳴る

(同)碁の客へ時計は無駄に鳴つてゐる

(人)腕時計見る萬歳師きざにみえ

(地)好ましく看護婦の靴音きいて時計巻

(天)キネマの女の時計にせかれて出

席題 鹿 雀 史 呂 選

(佳)牌の音瓦斯ストロツは青燃

由紀美

(同)しつとりと牌にふくた雨催ひ

(人)麻雀荘出て圓山の灯へ廻り

(地)麻雀を止す條件で話つき

(天)麻雀は四段不孝に慣れてゐる

席題 寶塚 與三郎選

(佳)妹に戀を教へた、たからづか

(同)寶塚ホール出た暗いホテルの灯

春光 豆樂

一寸御挨拶申上ます

名古屋 吉田 水車

貴重な誌面の一隅をお借りして一寸御挨拶申上ます、今度勤務先の命により名古屋出張所の方へ轉任をすることとなり四月廿日に當地に参りました、大阪には殆ど生れてからずつと居りましたのでお馴染も深く川柳も大阪で大方先輩の御指導でやつと筋道位覺へた時分にお別れせねばならぬことになりましたのは心残りでありましたが是非もないこと、觀念して参りました、近頃何もかも氣が短くなりまして距離のことも時間と言ふ様になり東京へ九時間名古屋へ三時間と言ふ其三時間餘で來られる名古屋へ來たとてそう大して遠方の様な感じは致しませんけれども皆様の御温容に左様たやすく接し得ないことはかなしい事實であるのがたまらなくさびしいことであります。名古屋も金鯉城下百萬の大都會でネオンもさかんですが今更大阪の空なつかしく思はれてなりません、おれがひ申すは只お見すてなく此上共一層の御指導御交誼を賜る様はるかに皆様の御多幸をお祈りする次第で御座います、十、四、二五

轉任の其氣になつたくにさかひ

大阪のネオンが戀し寝るとせう

下宿屋へ主も荷物も疲れ果て

大阪へ近く東京へ近いとこ (水車)

(同)観るだけの川も流れる寶塚

(同)寶塚うか〜と來て雨に逢ひ

(人)寶塚玩具のやうな人と逢ひ

(地)寶塚霧の中から袴來る

(天)テイルームの麗子をみつつけ

(軸)角帽に戀されそうな寶塚

與三郎 靜太

史 呂

靜太

春光

靜太

與三郎

靜太

編輯の窓

江 柳

▼山兩樓編輯長が東京の鐵道局へ突如榮轉されたので編輯局異變となり大の遅刊となつたが、何分の御諒承をお願ひする同氏擔當のバイロツト欄も

右事情次號へ譲る事となつた。

▼路郎主幹は大阪時事新報社廣告部へ入社元氣で活躍されてゐる、その多忙の中四月二十五、

六日の大阪朝日新聞ホームセグション欄へ「川柳に見る親ごゝる」を執筆された。

▼研究文及び雜文の文の原稿は澤山に頂いてゐるが、紙面の都合で次號に割愛した。尙柳壇畫報と共に次號を、御期待願ふ。

▼日本名所物川柳は休載となつてゐるが次號より毎月發表出来る様になつてゐる、切日も

別頃の通り改めただので奮つて名吟を寄せて貰ひたい。

▼岩崎路路氏夫妻の觀迎本社句會の後、南地大力にて觀迎小宴を開いた出席者は柳路 松代、路郎主幹、東魚、雨迷、九波、

艸樂、悟郎、淺花坊、綠雨、美那子、ひろし、翠夢、山兩樓、

禿山、かほる、みつる、勇、汀柳、萬よし、の諸氏、同夫婦は五月十日正午神戸出帆のうつみ丸で歸郷される。

▼山兩樓氏送別句會は別頃の通り十一日本社事務所で開催される、多數諸兄の御參會を祈る。

▼本社の川柳マツチは本社句會に出席者のみに呈上してゐるが、これを毎月揃えれば大變有意義なものであるとの好評を博してゐる、出席者以外には絶対に配布せない川柳マツチを取揃える意味に於ても缺かさず句會に出席される事をお奨めする。

▼東京へ山兩樓、名古屋へ水車

の兩氏の轉任は一面本社側の痛手ではあるが、何れも其の地で相變らず本社のため御盡力を下さるものであり、支局・支部設置の機運を生み本社の大發展が齎される事と信じてゐる。

▼本社同人平井春光君は去る四月二十八日の黃道吉日を選び華燭の典を挙げられた、尙同君祝賀の川柳句會は五月中旬、支部行人會主催で行はれる。

日本名所物川柳 投句募集

東京の巻

(四)「淺草」三句

(五)「吉原」三句

切 六月五日

選者 前田雀郎氏

宛先 本社事務所
用紙 ハカキに限る

▼本社同人の木曜會が創設された、時日は毎週木曜日夜、會費不要、場所は本社事務所、木曜日には路郎主幹は萬障を排して出社されるし僕も必ず在社するこれは一々案内状を出さないが同人諸兄は木曜には必ず來社される様にお願ひする。



社告

▼原史風君は本社同人として入社され社章を交附しました。

▼本社の句會係は奥野禿山君が新任されました。例會案内希望の方は、左記へお知らせ願ひます。

住吉區住吉町一六四

會報係 奥野 禿山

電話 南八六七・一二三七

(南五花街遊廓事務所)

川柳雜誌案内

六號活字十四號三行金五十錢、一行増すごに金十錢、但し前金切手代用可、その他改題、修訂、句會案内、柳齋廣告、その他

製並合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二巻より十巻まで

各壹巻 金壹圓五十錢
大阪市内送料 壹冊六錢
市外送料 壹冊廿四錢

大阪市天王寺區上沙町一丁目五二
川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「夏」 路郎 選
六月十日締切

その他雜吟を募る
▼用紙 官製ハガキ (化粧柳壇と明記の事)

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛

化粧新聞社

川柳まやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豊島區高田本町二の一
四六八 川柳まやり吟社
(取次所) 川柳雜誌社事務所

紀南柳壇

選者 麻生路郎氏

貝細工 五句
切 五月二十日

海岸 五句
切 六月二十日

大阪市西成區玉出本通三ノ三六
麻生路郎氏宛

朝報柳壇

雜詠 募集 汀柳選
用紙ハガキ、句數無制限

大阪市西區四ツ橋南
大阪朝報社
増位 汀柳宛

毎日川柳の事を掲げてゐる
大阪朝報をお読下さい

川柳雜誌

投句用箋

本社制規の投句用箋を左の通りでお頒ち致します、投句にはなるべく此用箋を御使用下さい。

五十枚綴 一冊 金拾貳錢 (送料共)

▲御申込は本社事務所 (切手代用可)

山雨樓氏送別句會

一、會場 川柳雜誌社會館(階下ホール)
上本町四丁目バ、修訂所西、約半丁
始めの四つ辻を南に折れるこ左に見ゆる雑居

一、日時 五月十一日(土曜)午後六時半

一、兼題 「信 頼」三句 山雨樓選

會費 三〇錢

川柳雜誌社
大阪市天王寺區上沙町一丁目
電話南六四四番

光耀句會さつき例會

場所 キング喫茶室 南海線玉出驛下車
本通十五間道路北ノ辻西入

日時 五月十八日(土曜日)夕刻より

會費 參拾錢

兼題 「紅茶」「メニュー」各題十句以内

さわやかなさつき夕べを同好の皆さまとお集りして會を開きたいと思ひます。遠方の方は兼題の投句を御記憶下さい。投句家及び出席者は婦人に限りませんが、本社選者の方々に御暇の方は御出席下さいまして御援助をひまします。

主催 川柳光耀會
幹事 竹内機見女

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樽」は全家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▼各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▼文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
- ▼締切は嚴守されたし。
- ▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募 集

第十二卷第七號課題

五月五日締切

(各題十句以内)

- ▼信心 高橋かほる選
- ▼夕立 生田翠 夢選

第十二卷第八號課題

六月五日締切

(各題十句以内)

- ▼アパート 住田亂 耽選
- ▼島 中島鐵 洲選

每 號 募 集

- ▼近作柳樽(十句) 麻生路 郎選
- ▼各地柳壇(會報)
- ▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切は事務所宛

定 價

- 一 部 金 拾 錢
- 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
- 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十年 四月廿五日印刷
昭和十年 五月 一日發行

第十二卷 第五號
(毎月一回一日發行)

禁 無 斷 轉 載

編輯兼發行印刷人 麻 生 路 幸 二 郎
大阪市内西成區玉出本通三丁目三六番地
發行 所 川 柳 社
電話天下茶屋二五七九番

事務所 大阪市天王寺區上沙町一丁目五一番地
電話南六四四番
振替大阪七五〇五〇番

川 柳 雜 誌 社

賣 捌 店 書

(大阪) 大賣捌二盛社書店 | 明文堂 其他 市内各書店 |
(東京) かん 東京堂 かん 嚴松堂 かん 吉岡書店 かん 玉森堂 かん 紀
伊國屋 かん 三味堂 (神戸) 米田、寶文館 (函館) 石塚 (京
都) 三宅 (名古屋) 靜觀堂

法學博士
三面子

岡田朝太郎 先生序 海野夢一 佛氏新著

新刊

川柳史講話

四六版總特上布裝
極堅牢上製本
口繪寫真凸版圖
函入四百十餘頁
定價金二圓二十錢
送料金十六錢

江戸時代文學に並ぶ國文學詩
歌川柳を研究する人々へ

初めて出版されたる川柳史の第一書！

今日まで全世界に行はれて来た詩型中最も短い型態を整へ、日本獨特の修辭と表現とを以つて、自由な内容縦横無盡に表現してゐるものは川柳である。川柳こそは世上の平凡事を、巧に拉し來つて冷徹なる批評眼に寫して即詠し、其處には何等の作爲もなく只眞實あるのみであるが、その卓越せる觀察眼を通じて第三者の眼前に展開せられる時は、觀る者は常に身邊に見聞せる事實の別扶であるだけに、却つて呆然たる態で川柳の句を奇抜なりといふも、奇抜、奇警といふのは、實は川柳の句の變態的に發展したる、狂句の上に與ふべき言葉であつた。然らば何故に「川柳」と「狂句」とが混同せられたか、それには理由がなければならぬ。その理由こそは川柳史を繕きて初め理解さるのである。

斯くの如き川柳を語り、川柳の歴史を語る著者は、夙に江戸文化の研究に志し江戸時代より今日に至る東京を語れる「東京巷談」の筆者として名あり。又川柳に志してより約三十年、或は川柳きやり吟社の主腦部とし、或は日刊新聞雜誌の川柳欄選者として知られ、先著「はしからはしへ」の如きは、江戸文化の研究と川柳の造詣の深きを語るものであり、又、先年は文部大臣の推薦により、藤村作博士の山崎麓學士、岡田朝太郎博士等と共に稀觀本「誹風柳多留」壹百六十七卷を完成せる等、川柳界稀に觀る篤學の人であり且つ初めて公刊せらるゝ本書「川柳史」の著者としての當代第一人者である事を、岡田博士等の等しく絶讃せらるゝ所である。苟も文學を解し詩歌川柳を口にする諸彦の絶對的好座右書。

發行所 東京市小石川區江戸川八十番 交蘭社 電話一五〇番 石一 小五 川番